

アマテウス通信

(制作・著作) 日本モーツァルト愛好会
〒152-0022 東京都目黒区柿の木坂2-22-23

朝吹 英和 方

2020.05.01 No. 55

TEL&FAX 03-3725-7179

創立40周年記念公演 『コジ・ファン・トゥッテ』に大きな反響



「ご縁」の連鎖に感謝！

K.425 朝吹 英和

話は10年前の2010年1月24日(日)に遡ります。当時、私は愛好会には入会していませんでしたが、愛好会の創立30周年記念第363回例会に宮田代表からご招待頂き出席致しました。後で伺った話では、私が拙著『時空のクオリア』(音楽と俳句に関するエッセイ集)を愛好会宛てに謹呈した事が切っ掛けとなったそうです。宮田さんは同著に収録されたフルーティスト加藤恕彦の事について愛好会の会員各位にご紹介して下さいたとの事でした。

東京オペラシティ・リサイタルホールで開催された例会のプログラムは前半が『劇場支配人』K. 486、後半がオペラのガラ・コンサートでした。

彌勒忠史さんの演出並びに出演による『劇場支配人』は実演に接する機会が少ないので、とても興味深く鑑賞しました。宮田さんから終演後の祝賀会にもお招き頂き、入会のお薦めを頂きましたが、当時は句会の日程と重なる事が多い為、臨時会員として何度か参加させて頂き、2013年7月に愛好会に入会した次第です。

その日から10年後の創立40周年記念第483回例会の企画を愛好会の代表として推進する事になるとは夢にも思いませんでしたが、公演のキャスティングを宮田さんにご相談した所、即座に愛好会との「ご縁」が深くオペラ歌手として第一線でご活躍中の増田のり子さんが最適任であるとのご判断を頂きました。そして、宮田さんから増田さんにご出演並びに共演者の選定を依頼して下さいました。

増田さんはお母様が愛好会の会員だった「ご縁」もあって創立20周年記念第243回例会にご出演下さいました。(2000年1月22日(土)／横浜みなとみらい小ホール)モテット『エクスルターテ・ユビラーテ』K. 165でのご出演でした。爾来、4回の例会にご主演頂き今回で6回目となりました。愛好会40年の歴史の中で最も多く例会にご出演下さった演奏家だと思います。

我が国トップスター演奏家の皆様による公演は、ツウの方からもツウでない方からも大変ご好評を頂きましたが、公演の実現に際しては様々な「ご縁」の連鎖が存在した事を有難く思います。

愛好会の特徴のひとつである演奏家との交流(例会は勿論、懇親会を通じて)によって生まれる「ご縁」をこれからも大切にして行きたいと思います。

◆ ◆ ◆

創立40周年記念コンサート 『コジ・ファン・トゥッテ』を聴いて

K.543 高橋 勇

1月愛好会例会コンサートはまさに創立

40 周年記念の名にふさわしい素晴らしいコンサートでした。本当に立派な到達点であり経過点であったと思います。

しかもプログラムはモーツァルトの神髄・本質であるオペラ全曲、愛好会のセンスが垣間見えるのではないのでしょうか。

全体の感想として、オペラとしてのドラマは際立ち、原語による本格派の一貫性もあり、また日本の音楽界を代表するソリストたちははちきれんばかりの「歌」を聞かせてくれました。まさに完成度の高いステージであったと思います。

当初ピアノによるバックアップなので少なからず心配感がありました。

ところがどうでしょう、フィオルデイリージの増田のり子さんとドラベッラの向野由美子さんのリリックにしてドラマティックな声質と素敵なお立ち姿、わたくしの好きなアリア「岩のように動かず」の増田さんは究極の名唄シュヴァルツコップを超えたと思えるほどでした。また九嶋香奈枝さんの軽妙なデスパーナ、お見事！ 男性陣はフェランド役の小堀勇介さんの降板はいかにも残念でしたがカバーして充分な渡辺康さん、負けずとグリエルモの青山貴さんは共に本格派の声で楽しませてくれました。さらにドン・アルフォンソの押川浩士さんはさすがベテラン、風格あるたたずまいでドラマの流れを作り、また彼の演出は簡素ながら妙に納得いくもので、演出家押川氏の遊びとツウなセンスを感じました。ただ幕開けにフェランドとグリエルモがTシャツ姿で出てきたときは「こりゃ何だ！」と思いましたが、口説きに入った場面転換後はコスチュームもエレガントな伊達男に変身、女性陣のルックスともどもステージを飾り立ててくれました。

忘れてならないのは、おひとりでバックアップされた朴令鈴（パクリンリン）さんのピアノ、全曲をリードするその技と絶妙な推進力に脱帽でした。終演後の祝賀会でお聞きしたのですが、一週間前には「フィガロの結婚」を全曲ピアノで弾き切ったとのこと、オペラ伴奏のスペシャリストだったのですね。

最後はモーツァルト・オペラのだいご味の一つ、終曲の出演者全6人の六重唱による見事な大団円、オペラに「来た、見た、聴いた！」

の満足感、bravissimo！

当日は田辺秀樹先生はじめクラシック界重鎮の方々にもご来場いただき、600名に及ぶご来場者で盛大な記念例会になったことはまことに晴れがましい思いでした。

企画や準備をされた運営委員各位のご苦労に感謝です。
(令和2年2月)



230年後の「ジャポネーゼ・コジ」

K138 鈴木 範宣

初演から230年という長い時を経て、ウィーンから遠く離れた、この日本の地で、モーツァルト・ワールド「コジ・ファン・トゥッテ」に出会えたことに感謝、感激です。しかも、この場所、この時代でしか、出現しえないような「ジャポネーゼ・コジ」を楽しめたのは、なんという幸せな巡りあわせでしょうか！

確かに、『オタクにキャバ嬢？ 大丈夫かな』と、ちょっとした違和感、不安から始まりました。ところがどうして、どうして。フィギュアやモデルガンなど玩具の延長として「女」を偏愛する男の子たちが出てきて納得！アルフォンソのうまい挑発にのって、生身の人間同士の愛に目覚めることになるのです。

バーチャルな恋人とは違って、思ったようにはいかないのが、生身の女。迫れば退かれ、拒否される。でも拒否＝斥力が強くなればなるほど、惹かれる＝引力もまた強くなる。引力と斥力のせめぎあい、反転、混乱から、調和し融け合う感情の動き。そして本気の愛の芽生え。モーツァルトの絶妙なアンサンブルによって、こうした生き生きとした人間の声、自分の身体中で響くのを感じます。そして、最後には、『女ってすてきだな。（自分自身も含めて）男ってアホだけど憎めないな。人間っていいな』と、ポジティブな心に満たされてしまいました。

キャスティングも抜群でしたね。

歌手としてのキャリアも、女性としての魅力も十分お持ちの、増田さん、向野さんですが、ピュアな心をもつキャバ嬢を身体を張って表現していました。いや、かなり楽しんでましたよね。(笑) 向野さんには思い出深い役ようですが、恋のゲームを楽しむかのような、コケティッシュなドラベッラが魅力的でした。

特に、フェランド＝渡辺さんに迫られる増田さんからは、演技とは思えないほどドキドキ感、ワクワク感が伝わってきて、とてもチャーミングでした。あんなった以上、FF(フィオルディリージとフェランド)はもう別れられないでしょう。手をつないで終わるラストシーンにも、そうこなくっちゃねと、納得です。

青山さん、渡辺さんは、これからの日本のオペラ界で大暴れしてほしいですね。(笑) オタクキャラもとてもわかりやすく、『まさにブッフアの世界』と思わせるような演技でした。声が立派すぎてオタクのイメージとはギャップがありましたが、もしかしたらオタクに対する偏見かなとも考えさせられました。

青山さんが懇親会で「一人で朗々と歌えばいいものではなく、常に相手を考えながら歌うのがアンサンブルの難しさでもあり、楽しみでもあります」と仰っていましたが、相手を想い、生み出されるハーモニーは、音楽の話だけではなく、男女間や世の中全般に通じる、大事なものですよね。「そうか、コジの魅力はここにあったのか」と、新たな発見をした思いです。

九嶋さんは、新国立劇場でのパパゲーナもピッタリはまっていましたが、このオペラに欠かせないキャラ、デスピーナで彼女の魅力がいちだんと発揮されたのではないのでしょうか。歌唱力と演技力、間合いのとりかた、自由自在のテンポ感に、「ノリ」のよさ。素晴らしいかったです。熟年の増田さん、向野さんに、九嶋さんが「女も15になれば」と説く姿が、またおかしく、キュートでしたね。

何と言っても、この公演の成功は、押川さんと朴さんのおかげだと思います。

押川さんの演出とアルフォンソには、何度も「ブラボー！」です。字幕もひとつの演出装置であると思いました。外国語の作品を日本で上演するという弱点を逆手にとって、強みに変える。演出による設定と原作のギャップを字幕でカバーする。字幕も楽しめる公演というのも、そうはないでしょう。

また、押川アルフォンソは、年長の皮肉屋でなく、若者へのおおらかで深い愛情を感じさせるものでした。舞台だけではなく、厳しくも、後輩への熱い思いがあふれる稽古だったようですね。押川さんには、「歌手」に納まらない才能を感じました。ぜひ、演出分野も含めて、「楽譜に描かれた音符や文字に肉体と感情を与えてお客様の前で披露する、演奏家」(パンフのご自身のコメント)として、もっともっと活躍してほしいですね、

このコジがコジたりえたのも、朴さんのピアノ伴奏にかかっていた。オーケストラ版の原作とは違った魅力を生み出していましたね。ピアノもアンサンブルの一要素を担うと同時に、時間と空間の転換や伸び縮みを、観客に想像させる役割も果たしていたように思います。

最後に、愛好会運営事務局のみなさまに、あらためて感謝いたします。作品・公演方針の決定、キャスティング、盛会にむけてのPR活動、オンリーワンの素晴らしいパンフレット作製、不測の事態への対応、等々。こんなに素晴らしいモーツァルトの世界を楽しめたのも、みなさまのご尽力の賜物であると思います。ほんとうにありがとうございました。



愛好会創立40周年記念公演

K.450 宮田 宗雄

祝日本モーツァルト愛好会創立40周年！

この記念の日を迎え、600人を超える観客に記念公演《コジ・ファン・トゥッテ》を楽しんでもらえたことは、格別に感慨深い。

モーツァルト没後200年の記念の年、1991年に入会したので、今年で29年目。2007～2015年の8年間図らずも代表になった。初代代表の桜田斉さんは、重病で入院されているらしい。2代目の代表の福田邦夫さんと3代目の代表の播磨克彦さんは相次いでこの世を去ってしまい、会員の中で代表経験者は高橋勇さんと小生の二人きりになってしまった。

一昨年、朝吹代表から創立40周年に迎えての相談を受けた。オペラをやるなら今までにやったことのない《コジ・ファン・トゥッテ》、そしてこれまで何回も愛好会に出演していただいた二期会の重鎮の増田のり子さんに取りまとめをお願いしてはどうかと進言した。出演者には増田さんの他に、増田さんと親交の深い向野由美子さんと、今売り出し中のテノールの小堀勇介さんを推した。朝吹代表とご一緒に、増田さんと演出を担当していただいた押川浩士さんと顔合わせしてから、朝吹代表が中心となってこの企画の打ち合わせが進められた。

愛好会ではもちろん、他の愛好団体でもやったことのない大ホールでの単独主催の公演の実施に踏み切った朝吹代表の英断と勇氣に改めて敬意を表したい。また多額の寄付など会員のご理解、ご協力が実現に大きく貢献したことは特筆すべきことだと思う。

会員の友人・知人に限って半額でこの一大イベントの入場券を提供するという会員の特典を最大限活用させてもらった。オペラに親しみのなかった人にも積極的に働きかけることができた。更に、昨年の日本音楽コンクールの声楽部門で1位になり、NHKでその模様が放映された小堀勇介さんの出演予定は勧誘していく上で大きな目玉となった。このことによって日本モーツァルト愛好会の存在を少なからず知らしめることができたし、同時に小生の個人的な旧交を温めることができ

た。会員の皆さんが、あまりこの特典を利用されなかったことを知り、勿体ないと思った。

その小堀さんが本番直前に健康上の理由で降板せざるを得なくなった時は、一瞬どうなるか不安が過った。でも、そこは小堀さんの何とかこの緊急事態を切り抜きたいとの強い責任感から2年先輩の渡辺康さんをお願いをしてカバーをしてもらえることになった。その渡辺さんは、数日前の合同リハーサルを1回やっただけで、後は本番当日のリハーサルのみだったのに見事に代役を務めていただき、無事に公演を終えることができた。まさに救世主であった。共演した歌手の皆さんも様に驚いていた。終演後の新年会の席で、押川さんが「共演者は共済組合のようなもの」と言った言葉が重かった。押川さんのアルフォンソも良かったが、舞台をキャバクラとオタクに設定し、現代風ではあったが、分かり易く面白かった。オペラ経験のなかった人も十分楽しんでもらえたことが、終演後の感想からも窺えた。もちろん音楽学者の加藤浩子先生のようなプロの方からも好評であり、まさに「ツウの方でも、ツウでない方でも楽しめる」という我が愛好会のモットーに相応しい例会であったと思う。ただ、会員の参加人数が期待したほど多くなかったことは気になった。体調の問題などいろいろな事情があったとは思いますが、原因を分析して今後活かしてもらいたいと思う。

10年後と言わず、もっと短いスパンで無念の降板をした小堀勇介さんを加えて、またオペラの公演の実施を考えていただきたい。つくづくこの記念公演で新型コロナウイルスの感染が起きなかったことや、公演中止にならなくて良かったと思った。

この一大イベントが成功裏に終わったことは、朝吹代表はじめ関係各位のご尽力の賜物であり、会員の一人として改めて深く感謝申し上げたい。



創立40周年記念公演を聴いて

K.317 本吉 英紀

小堀勇介さんの降板は大変残念だったが、急な交代にもかかわらず代役の渡辺康さんが頑張ってくれた。6名の歌手、ピアニストの素晴らしい熱演、第一生命ホールはほぼ満席。舞台の上には、下手にピアノ、真ん中に4台のコントラバス用の椅子、上手にバーのカウンターが設定されている。最初の三重唱からバリトンの押川さんの存在感が素晴らしく、オペラに引き込まれた。歌手の皆様は、東京二期会や藤原歌劇団のトップクラスだけあり、その演奏には大変感動した。個々のアリアも素晴らしいが、アンサンブルは大変聴きごたえがあった。

フィオルディリージ役の増田のり子さんは愛好会創立20周年記念演奏会をはじめ、例会には今まで度々出演され好評であった。アマデウス通信54号の「祝40周年 ちょっとひと言」欄で会員の松尾さんが、増田さんは日本を代表するモーツァルト歌手として活躍してきたと書かれているが、その通りで、東京二期会や新国立劇場での活躍については、公演プログラムの出演者メッセージやプロフィールに詳しく書かれている。2006年11月の東京二期会、モーツァルト生誕250周年記念公演「コジ・ファン・トゥッテ」、指揮：パスカル・ヴェロ、演出：宮本亜門、ではフィオルディリージ役で出演され、愛好会会員のファン約20名が日生劇場に駆けつけた。演出家独特の動きの多い複雑な演技をしながら、高音から低音までの乱れることのない張りのある歌声によって、この大役にかける熱意、意気込みが強く聴き手に伝わってきたのが記憶に新しい。今回の公演でもモーツァルトの女性役の中で最も至難と言われているアリア（No.14）「岩のように動かずに」を素晴らしく歌い上げるなど、2006年の公演以上の大変な熱演で我々を感動させてく

れた。本公演が大成功に終わったのも、演出も担当された押川さんとともに増田さんの役割が大きかった。演奏家の皆様の素晴らしいチームワークがあり、創立40周年記念公演はいつまでも記憶に残る素晴らしい公演でした。



創立40周年記念公演 『コジ・ファン・トゥッテ』について

K.287 勝間田 弘幸

なんと「コジ・ファン・トゥッテ」の全2幕をモーツァルト愛好会の主催で開催という勇断に拍手！公演直前に小堀勇介様が健康上の理由によりやむなく降板、フェランド役としてテノールの渡辺康様が出演というハプニングがありましたが無事に感激の公演になり拍手喝采でしたが、正にこのオペラの音楽とストーリーとも両々相まって鎬を削るというか、それこそお芝居を超えてあたかも幾つもの真剣の上を素足で渡り切るような凄みと気魄に満ちた舞台に圧倒されました!! ほんとうに関係者皆様ご苦労様、お疲れ様でした。

このオペラを作曲年代順から見ても、この付いたり離れたり恋という名の磁気力シリーズには「後宮からの誘拐」「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」などがあり、「コジ・ファン・トゥッテ」では磁石が登場して正にこのシリーズの総仕上げのような感も抱いてしまいますが、やはりこのオペラで気になるのがフェランドとグリエルモが毒を飲んだ後に現れる医者を取り出す磁石です。付いたり離れたり恋の病にはかなり効き目がありそうで当時、真剣に磁石による治療に取り組んだ医者もいたと聞き、朝吹代表に尋ねたところメスメル博士に関する資料などを頂きビックリ！でした。そこでその中から少し抜粋してみます。

メスメル博士（1734～1815）はドイツ人医師。動物（生命ある存在として人と動物を指

す) 磁気と呼ばれるものの提唱者。芸術のパトロンであったメスメル博士は、モーツァルトの人生の途上に何度か姿を現す。「バステイアンとバステイエンス」はメスメルの注文で作曲され、おそらくは彼の庭園劇場で演じられた。メスメルとモーツァルトの家族間の交友関係は長く続いた。

「コジ・ファン・トゥッテ」の第1幕第16景の台詞には「彼は何か鉄片を手になされる。これなるはあの磁石の一片、メスメル氏の石ですぞ! これは生まれはドイツ国でして、それがその後これほど有名にあちらのフランス国ではなりました。」と。ここで、アニー・パラディ著「モーツァルト魔法のオペラ」より引用しますと、「勿論このオペラにおいて、ヴォルフガングは1778年から1785年の間、ヨーロッパで特にフランスにおいて、大いにもてはやされていた磁気療法のパロディを楽しんでいるのだ。滑稽に演じられてた磁気による発作は、とりわけ男女を強く引きつけ合う力を暗示しており、実際その力によってフィオルディリージはフェランドの腕にドラベッラはグリエルモの腕にそれぞれ飛び込んでゆくことになる。霊気を解き放つ動物磁気的>物体を活性化させることによって、デスピーナは、メスメル博士の学説にしたがい個人と自然との調和を取り戻した。言い換えるなら彼女は法に対する本能の優越を復活させたのである。同様にまた、彼女は病をもって病を制したのだ。というのも恋は死に至らしめる毒と同時に命を取り戻させる薬でもある。作品の中心におかれたこの愉快的磁気治療の場面は、それゆえ作品のターニングポイントでもある。一中略一彼等は後戻りしなければならない。但し、今度は別のパートナーと連れだって慣習的道のりを引き返し、求愛のすべての段階をもう一度辿り直さねばならない。そしてこのプロセスの当然の帰結として彼等は結婚のパロディへと行き着くだろう。こうして再びナイーブでしかも気取った言葉の季節が戻ってくる。約束が取り交わさ

れ、愛し合う身体同士が優しく触れあう。また、セレナードの花のものの憂い散歩の可愛らしい時が戻ってくる。勿論これは人生に幻滅した老哲学者と機知に富んだ女中がすべてを仕組んだゲームにすぎない。だが残酷なゲームではある。というのも、この若返りは過去を消し去りはしないのだから。過去は新しい恋人たちの記憶に時折生々しく蘇ってくる。しかも、その内二人は——うっかり忘れるところだが——芝居を演じていることになっているのだ。磁気治療による発作は、第2幕の大混乱をも予示しているのではないだろうか?」と・・・



愛好会 40 周年記念祝賀会の報告

K.134 桐生 雅明

40 周年記念公演成功までのプロセスやご苦労は、諸氏の原稿に詳しく述べられています。私は公演後に行われた愛好会の 40 周年記念祝賀会の幹事と司会者を務めたので、その様子などを中心にご紹介します。記憶違いや抜けている事柄があるかもしれませんが、ご容赦ください。

盛り沢山で楽しい会に

今回の祝賀会は 12 月と同じトリトンスクエア内の T X カフェで行い、愛好会会員 45 名、会員以外の参加者 4 名、公演の出演者 8 名、来賓の野口秀夫先生の計 58 名が出席しました。今回は 2020 年の新年会も兼ねていましたが、40 周年記念ということで特別の企画としました。朝吹代表の挨拶、出演者の方々へのインタビュー、野口先生や会で長く活躍された方々からのメッセージなど、短い時間でしたが盛り沢山の充実した会となりました。

最初に挨拶に立った朝吹代表は、40 周年に向けた会独自のオペラ公演実現までの取り組みを、苦心の裏話なども交えて振り返

るとともに、成功に尽力していただいた方々に深い感謝の意を表しました。その後、恒例の前年加入した新会員の紹介が行われ、4人の方が抱負を述べました。2019年の新入会員が13人なのに対して参加者が少なく、呼びかけや声掛けの必要性を改めて感じました。

出演者へのインタビューから

～急な代役も見事に乗り切った渡辺康さん～

新入会員の挨拶に引き続いて、当日出演された6名の歌手とピアニストの朴さん、舞台監督の村田さんの8名の方に、広瀬さんがインタビューしました。いずれも興味深いお話でしたが、とりわけ大きな関心と呼んだのは、公演直前に降板のやむなきに至った小堀勇介さんの代役としてフェルランド役を演じた渡辺康さんのお話でした。公演までわずか3日というタイミングでの代役決定にもかかわらず、どのようにして立派に舞台をこなされたのか、参加者すべてが聴きたかったと思います。

渡辺さんは以前フェルランドを演じた経験があったため、歌は覚えていたそうです（覚えていたとしても、かなりの時間歌い、演技もするというのは、私たちにはなかなか信じられないことです）。また練習の際の小堀さんの演技をピアニストの朴令鈴さんが動画に撮影していたので、それを基に振り付けができたことも大きかったそうです。小堀さんから急な依頼を受けたときも「小堀君のために何とかしたい」と、すぐに意を決して了解されたそうです。出演者の皆さんの温かいフォローを受けて懸命に努めた結果が成功につながったと語っておられました。もし渡辺さんがいなければ公演自体が成立しなかったかもしれない、また練習の記録画像がなければ、振り付けなしの演奏会形式になったかもしれないと思うと、奇跡的な幸運が重なったといえるでしょう。私は、愛好会も出演者の方々も懸命に取り組んできた結果が幸運を呼び込んだ

のだと思います。

ピアノを担当された朴令鈴さんのお話も、とても示唆的でした。朴さんはオペラのピアノ伴奏の経験が豊富ですが「コジ・ファン・トゥッテ」全曲は3度目、レチタティーヴォも含めた完全な全曲は初めてとのことでした。今回の公演で「レチタティーヴォあつてのオペラだな」と痛感されたそうです。「コジ」のピアノ伴奏譜は、「技術的には初見でも弾けるくらい」だと話されたのにはびっくりしました。

今回の上演は、舞台を現代のガールズバーとその客という設定に読み替えた一種の「現代的演出」ですが、これはドン・アルフォンソ役の押川浩士さんのアイデアとのことです。第2幕終わりの結婚式の場面にはシャンパンタワーが登場しますが、こうした仕掛けは舞台監督の村田さんのアイデアだと明かされました。

今回の舞台は、現代のいかにもありそうなシチュエーションに置き換えたものですが、インタビューを聴いていて、こうしたアイデアが歌手と舞台監督の方の共同作業から生まれたのだと感じました。

AIと音楽の関わりを話された野口秀夫先生

来賓として挨拶をお願いした神戸モーツァルト研究会代表の野口秀夫先生は、最近関心と呼んでいるAIによる作曲の話がされました。モーツァルトの作品や作曲技法をAIに学習させ、モーツァルトならこのように書くだらうという「作品」をつくる試みです。野口先生によれば、こうした「作品」は外見はともかく内容は問題にならないそうです。このことから、芸術は最も人間的な営為であることやモーツァルトの凄さを改めて痛感したと話されました。先生が代表を務める神戸モーツァルト研究会は、メンバーは少ないものの旺盛な活動を続けておられるとのことで、今後も愛好会と友好関係を強めていきたいものです。

会で長く活躍されている方々からのメッ

セージ

会の代表を務められた宮田宗雄さんと高橋勇さん、中條熙子さんのお三方からメッセージをいただきました。代表を務められた宮田さんと高橋さんは、愛好会独自のオペラ公演を実現できるまでに至った道のりを感慨を込めて振り返られました。中條さんは、入会された当時の代表だった故播磨克彦さんの思い出や以前の会の様子などを話されました。話の尽きない会でしたが、最後に吉野副代表が中締めをしました。

最後に ～幹事、司会者としての反省～

限られた時間内に多くの方々にお話ししていただくため、タイトな進行が予想されました。そこで事前に詳細なタイムテーブルを作っていただいたうえで臨みましたが、実際にやってみるとタイムテーブル通りにはいかず、また、皆さんの歓談の状況も見ながら適切なタイミングを見計らって次のステージに進めなければならないので、正直アップアップでした。

もう一つ失敗談です。広瀬さんの文章にも触れられていますが、後から来場された出演者の分の料理が少ししか残っておらず、慌てて確保してもらおうという失敗もありました。量が少なくて不満だという参加者の声も聴かれました。これは、ほぼ参加人数分の料理を注文していたにもかかわらず、想像より料理の分量が少なかったこと、幹事が司会者を兼ねていて気が付かなかったことなどから起きたミスです（初めて頼んだコースのため料理の分量が分からなかったこと、TX カフェは当日の追加注文がきかないという事情がありました）。この教訓を生かして、2月からは例会後の懇親会で料理の取り置きをお願いするようにしました。

最後になりますが、素晴らしい会にしてくださいました出演者、来賓をはじめ参加者の皆さんに厚くお礼を申し上げ、40周年記念祝賀会の報告とします。

【40周年記念例会催行に至るまでの 苦労話あれこれ】

K.581 広瀬哲哉

2017年4月に、朝吹さんが、高橋前代表から愛好会代表職を引き継いだ際の最大の課題は、2020年1月の愛好会40周年記念例会の催行でした。愛好会会員の方々の長年のご愛顧に応えようと、大きな会場で、一流の音楽家の方々をお呼びしての例会を実施するには、通常の例会の何倍もの費用がかかり、他方、会員数がここ数年は120名前後で横ばいの中、臨時会員を相当数集める必要があるので、愛好会の基礎体力以上の大幅赤字は覚悟する必要がありました。

そこで朝吹代表が出した方針が、

①40周年記念例会は、大規模に晴れやかに行う。

②そのため、大幅赤字が予想されるが、それを極小化する努力をすると共に、その赤字を補うために、魅力ある出演者とプログラムによる、中規模会場でのコンサートを何度も行い、収益を上げると同時に、その結果としての新入会員の増加にもつなげたい、と言うものでした。

この方針に対し、小生は完全に賛同しましたので、その後は、一運営委員として、朝吹代表から出る指示に忠実に、具体策を一つ一つ実行して行っただけなのですが、もちろん、いくつもの壁にぶつかり、また、相当粘り強く対処しないと実現出来ないことも多々ありましたので、ここでは、そうした事柄のいくつかを、参考までに皆さんにご披露させていただきます。

1) 出演者の選定 (2017年10月から始めました)

・今回の出演者の中心だった増田のりさんは、その母上が、愛好会会員だったこともあ

り、愛好会創立 20 周年のコンサートへのご出演に始まり、他の例会への出演、或いは、増田さんが出演された二期会や新国立劇場でのオペラ鑑賞など、愛好会とはご縁の深い歌手の方ですが、宮田・前々代表が、増田さんにお話を持ち込んで、この企画が始まりました。

・最終的には、ご出演の歌手の方々 6 名にお願いすることに決まったわけですが、歌手の方々は、所属の歌劇団や新国立劇場でのオペラ出演の話が来れば、乗りたいところあり、その前に愛好会例会への出演をコミットすることに躊躇される方もおられる中、その間の事情は詳しくはわからないものの、増田さんの采配でうまくまとめてくださいました（他の例会のケースですが、過去には、早いタイミングでの交渉がスムーズに行かなくなりかけたこともありました）。

我が国トップクラスの出演者の皆様をキャスティングしていただいた増田さんのお陰で素晴らしい例会になりました。

2) 会場予約

・日本の一流歌手が 6 人も集まっの「コジ・ファン・トゥッテ」全曲演奏なので、それなりの舞台や会場の広さが必要ですが、会場費にいくらでもお金をかけられる状況になく、あれこれ検討結果、選んだのが、晴海・トリトンスクエアの第一生命ホールでした。

・出演者のスケジュールを押さえるためにも、出来るだけ早く公演日を決めることが肝要で、(通常は 12 ヶ月前予約が多い中) 第一生命ホールは 18 ヶ月前予約が可能とのことから、2018 年 7 月 1 日の予約開始日に向け、準備していた矢先、先方から、「音楽事務所などの業者からの受付は 18 ヶ月前だが、モーツァルト愛好会のようなアマチュアの団体からの受付は 12 ヶ月前」と言われました (使用申込説明書にはそうした明記なし)。そのため、一時は、このホールを使用することはあきら

めかけたのですが、フォルテピアノの小倉貴久子さんのコンサートなどを担当する NPO 法人トリトン・ネットワークの、女性担当者に相談したところ、「モーツァルト愛好会は、毎月例会を行うしっかりした組織であること」を第一生命ホールの幹部に掛け合いましょうと言ってくれたのです。彼女の奮闘の結果、目論み通り、18 ヶ月前の予約が出来ました。勿論、その際には、彼女が先方とうまく話が出来るように、愛好会の歴史から、最近の活動状況まで、大部の書類を揃えて提出しました。日頃から愛好会を通じて外部の方々との人脈を作っておくことが大切な事を改めて実感しました。

3) 臨時会員の集客

さて、出演者が揃い、会場も決まったので、次にやるべきは、如何にして多くの臨時会員を集めるかです。当初は、第一生命ホールの定員 767 席の約半分、350 席が埋まれば、何とかあまり空席が目立たないだろうと考え、会員と招待者で 100 名、それに臨時会員 250 名の集客を第一目標でスタートしました。

・チラシ作戦の展開

まず、吉田副代表の、いつもながらのセンスあふれる、40 周年記念例会のチラシを、通常より早めに作ってもらい、出演者や、我々の例会での配布は勿論、モーツァルトのオペラに興味のありそうな人たちが集まるであろうコンサートで、(その出演者に) プログラムへの挟み込みを頼んだり、そうした伝手が無い時は、会場前で配布されるチラシの束に入れるよう業者に依頼したり、はたまた、最近の例会出演者のうち、若い人に頼んで、東京藝術大学や東京音大、お茶の水女子大などのスタンドにもチラシを置いてもらいました。また、モーツァルト学の第一人者・海老澤敏先生にも、先生の講座で PR してもらうことに成功するなど、出来ることは何でもやりました。

それらの結果、累計で、合計 45,000 枚近くのチラシを配りました。1 月例会の告知にとどまらず、愛好会の存在を幅広く多数の方々に PR する意味で効果があったと考えています。

・会員割引制度の導入

この 40 周年記念例会を是非成功させたいとの、小生自身の個人的願ひもあって、早い時期から、自分の周りの親しい人たち（学生時代や会社勤め時代の友人・知人、現在の楽器演奏仲間など）にも幅広く、この例会への参加を呼びかけていましたが、その後、朝吹代表ご提案の会員割引制度が導入されたこともあって、自分が想定していた以上の何倍にもなる、沢山の臨時会員券を販売出来ました。勿論、一挙に 10 枚単位で買ってくれる方はいないので、例えば、「子供が一度オペラを観たいと言っている」との、ママさんの情報をマメにフォローして 3 枚販売した、などの積み上げ結果です。会員の皆様のご尽力のお陰でこの制度適用チケットの販売総数は 356 枚でした。

また、会員からの要望もあって、全くオペラや、「コジ・ファン・トゥッテ」のことを知らない方々向けに、A4 版 1 枚での、関係者相関図を含めた「あらすじ」も作成して PR に努めました。

・これらの努力の結果、

当日は、600 名の方々にご来場いただきました。

4) 出演者との事前打ち合わせ、リハーサル立ち会い

・出演者 7 名（ピアノ伴奏の方も入れて）の方々とのコンタクトはずっと、朝吹代表お一人にお願いしていたのですが、皆さん、とてもお忙しく、第一生命ホールとの公演 1 ヶ月前打合せをした昨年 2019 年 12 月 23 日の時点でも、まだ、どのような演出になるのか全くわからず（その日は、出演者側まとめ役の押川浩士さんはコンサートご出演が目白押しで

ご都合が付きご欠席です）、年明け後も、もやもやした気分で過ぎましたが、やっと、本番 4 日前の 1 月 22 日（水）の午前 11 時から、何回目かのリハーサルに朝吹代表・本吉さんと共に、お邪魔することが出来ました（押川さんや増田さんが教えておられる、洗足学園音楽大学のキャンパス内の教室です。東急田園都市線・溝の口）。

・既に、3～4 回のリハーサルを終えた後だったので、いきなり、第 1 幕 75 分を通しての演奏です。第 1 幕を観させていただく中で、直観的に、「これなら、ツウでも、ツウでなくても楽しめる」と確信しました。日本の一流歌手陣による歌唱に、舞台衣装、それに工夫を凝らした演技も入り、また、ピアノ伴奏に拘わらずではなく、だからこそ、通常のオーケストラ伴奏とは異なり、歌声が良く聴こえるのです。

「ツウでない方」にも面白く思ってもらえそうな演技も入っていました。

・我々は教室の最後部の椅子に座って観ていたのですが、前の方の机の上に、コーヒー缶を 2 つ組み合わせてスマホを立てかけ、リハーサルの様子を録画しているのが見ええました。

5) 小堀勇介さんの突然の降板

・そのリハーサルの翌日 23 日（木）の夕方 7 時ごろだそうです、小堀さんから朝吹代表のところにメールが入り、「突然で申し訳ありませんが、体調不良のため、自分は降板せざるを得ず、代わりに、大学の先輩でもある渡辺康さんをお願いしました」との連絡があったそうです。

・この連絡と言うか、小堀さんの決断がもう 1 日遅れていたら、当日の公演は、振りなしの全くの演奏会形式になっていた可能性があります。明くる 24 日（金）と、例会当日午前

中のリハーサルだけで、小堀さんがいた時と同じ舞台が蘇りました。代役を引き受けてくれた渡辺さんのプロ魂に敬意を表すると同時に、上述したスマホでのリハーサル録画をしていたピアニストの朴令鈴さんに「あっぱれ！！」です。

6) そして当日の公演です

・会場には朝9時に入りましたが、出演者側まとめ役・押川さんと舞台監督の方は既に舞台上で準備を始めておられました。その後は、次々に出演者の方々も来られ、また、愛好会の運営委員やボランティアの方々にも集まっていただき、何種類ものチラシをプログラムに挟み込む作業を人海戦術で行いました(全部で700セットを用意)。ようやく作業が終わりかけた時、出演者依頼のチラシ1枚がようやく到着、そのために、開場時間ぎりぎりまで、追加の作業が続きました。並行して、出演者などの方々に昼食の希望を聞いてそれらを、また、歌手には欠かせない舞台両袖置きの水などの買い出しにも走り回りました。

・午後2時、いよいよ開演。舞台での演技・演奏は皆さんご存じの通りですが、ホールからは、本番中もロビー内並びに舞台袖にそれぞれ愛好会の窓口の人を置いてくれとの指示があり、その対応をする人を配置しました。大きな会場であるだけに、案内係が16人もいて、遅刻者対応などを含めたお客様のケアは万全なのですが、その分、ホール側との連携プレーが必要で、その事前打合せを綿密に行い、また、事前にスタッフの入館者名簿や当日の進行についての事細かな書類の提出が求められました。

・公演も無事終わり、お客様にも概ね好評、出演者も大勢の観客の前で歌うことが出来、終演後の祝賀会会場でのインタビューでも、そうした喜びの声を聞くことが出来ました。

・公演の裏方としてもホット一息付いたところですが、まだ最後の仕事が残っていて、楽屋・我々の控室やロビーの原状復帰に向けての最終確認です。ロビーの愛好会デスクには余ったプログラムや挟み込みチラシが山ほどあり、それを皆んなで手分けして、持ち帰り分・廃棄分などに分類、また机も元の位置に戻します。また、ホールの係の人からは、「(楽屋近くの) この貴重品ボックスの2番が使用中です。どなたが使用中か確認ください」と言われ、出演者に確認、また、我々の控室に、コートが1着残っていて、それを祝賀会場に持参するなどして、ようやく祝賀会場に落ち着きました(開宴から1時間近く経った6時過ぎ)。そこで、食事になりつこうとして、料理置きテーブルを見たら、何と、ほんの限られた種類の食事しか残っておらず、急遽、これからやって来る出演者7名用として、残った料理をキッチンの方に下げてもらって、準備・対応しました(我々の貸切でしたので、追加注文出来ないお店でした)。

7) 最後に

・この投稿をお引き受けした理由の一つは、例会催行にあたっての事細かな苦勞を、皆さんに知ってもらうことでしたが、それだけでは、単なる愚痴に終わってしまいます(長々とお付き合いありがとうございました)。実は、本当の理由は、もう一つありまして、引き続いての愛好会の例会運営方針を会員の皆さんに、今一度理解していただくことでした。

・その基本方針とは、従来と全く変わらず、既存の会員の皆様が、比較的低料金で質の高い音楽を聴いていただくことです。ただ、そのためには、会員数が現状より増える、或いは最低でも現状の120名が維持出来ることが前提ですが、実際のところ、毎年、ご自分の、或いはご家族の健康上の理由などで、やむな

く退会される方が10名程度はおられます。この減員分を毎年、新入会員で補って行かないと、同じ低料金で質の高い音楽を提供することが段々難しくなってくるのは、残念ながら、厳しい現実です。

この厳しい現実を乗り越えるには、質の高い演奏者による、より良い「愛好会ならではの企画」を月次例会で地道に続け、一人でも多くの新入会員・臨時会員を獲得することが唯一の方策であるとの、朝吹代表の方針があり、今後とも、苦労は尽きないものの、光が丘美術館での例会のみならず、初台・リサイタルホールや、池袋・自由学園明日館など、中規模会場での例会も適宜実施し、この方針を貫いて行きたいと思っています。ただ、中規模会場になると、会場費も高くなり、より多くの臨時会員が必要です。

改めてのお願いですが、会員各員におかれましては、周りにおられる知人・友人の方々を、ひとりでも、出来れば新入会員に、或いは、各例会への臨時会員に、お誘いいただければ、大変嬉しく思います。

♥ ♠ ♣



❖ 寄せられたコメントの数々 ❖ (敬称略)

加藤浩子 (音楽評論家)

昨日はこちら。日本モーツァルト愛好会、創立40周年記念の「コジファントウツテ」。ピアノ伴奏でしたが、好水準で楽しめました。お目当ての小堀勇介さんが急病降板で残念でしたが、代役の渡辺康さんは素直でリリカルな声、綺麗なレガートで好演。急なピンチヒッターだったと思いますが、よく準備されたと思います。グリエルモの青山貴さんはさすが活躍中の歌い手だけあって一番堂々とした声。豊かな響きと芝居っ気。客席に降りての第2幕のアリアは上手かった。ドラベッラの向野由美子さんは安定した技術、メヅらし

い色味のある声。

フィオルディリージの増田さんはダイナミックな熱唱。デスピーナの九嶋さんはチャーミングで若々しい。ドン・アルフォンソの押川さんは厭世的でない、ポジティブなアルフォンソでした。歌役者ですね。

演出も押川さん。設定を現代に置き換え、「オタク」の青年2人がホストのように変身して口説く成り行きは、まあ、こちらの方になびくわね、というある意味自然な設定。アルフォンソはキャバクラの店長で、デスピーナはキャバクラの黒服だそうです(バーテンダー兼)。大道具はバーカウンター、小道具は、第2幕の逢引の場で、恋人たちを結びつける太いリボンのような紐が活躍。結末は恋人同士は元の鞘に収まった？と思わせて、新しいカップルのフェッランドとフィオルディリージが、密かに手を繋いでおりました。

ピアノの朴令鈴さんは快速調のテンポ(なんと20分の休憩を挟んでも2時間45分!)で飛ばし、軽快な「コジ」でした。ピアノ伴奏であっても、実にバランスのとれた完璧な音楽だということがよくわかったのは収穫でした。

(加藤浩子先生のフェイスブックより)



野口秀夫 (神戸モーツァルト研究会代表)

「大歌劇団のフル公演の如く盛大で、また内容も充実し感激しています。演奏会形式、ピアノ伴奏、ということで、どのような舞台になるのか楽しみにしていました。

実際にピアノの演奏により、一般のオペラ公演とは異なる表現が際立ってそれが特徴となって迫って来ました。歌とのバランスが良かったのだと思います。

演奏会形式と言いながら装置も演技も十分に楽しめ、字幕の助けを借りて現代の男女であればこうであろうという読み替えの主旨が素直に理解できました。

合唱がカットされていたことについては賛否両論を耳にしました。愛好会の心得のある方々による合唱が可能だったのではないかと、ご意見もありましたが、「ハレ」の上演には「ケ」の入り込む余地はなかったであろう、というのが正直な感想です。

全体的に速めのテンポで、キリっとした全曲の仕上がりになったと思います」



増田弥生 (MSp 歌手)

実力もキャリアも兼ね備えた歌手だからこそ、の愉快的な演出、そして流石の演奏に心から満足しました。新国立劇場オペラ研修所で第4期同期生の九嶋さん、青山くんがご出演だったのも嬉しかったですし、何よりも急に代役を務めたテノールの渡辺さんには敬服し、皆さんの素晴らしいチームワークに感動致しました。また配布されたプログラムが大変読み応えがありました。朝吹代表のご挨拶文「人生において～」の件は心に染み入りました。出演者のモーツァルトへの思いも知ることが出来て嬉しかったです。



加藤 明

素晴らしい「コジ」感動致しました。第一生命ホールの立派さにも驚き、多くの気付きを得る事が出来ました。(モーツァルト広場代表/秋田のモーツァルト愛好団体)



白柳和男 (70代)

“人生において過去は記憶の中にあって存在せず、未来は想像の中にしか存在致しません。唯一の存在である今この瞬間の連続である音楽を聴く事によって無常に流れる時間を人生の喜びや憂愁に満ちた豊かな時間や空間に変換する事が出来るのではないのでしょうか”

これは日本モーツァルト愛好会の代表を務める朝吹英和氏が、2020年1月26日に第一生命ホールで行われたモーツァルト「コジ・ファン・トゥッテ」プログラムの挨拶として書かれた一節ですが、正にそれを実感する

ような時間と空間を体験してきました。たった7名による舞台です。

フィオルディリージ/増田のり子

ドラベッラ/向野由美子

デスピーナ/九嶋香奈枝

フェルランド/渡辺康

グリエルモ/青山貴

ドン・アルフォンソ/押川浩士

ピアノ/朴令鈴

1790年1月26日、ウィーンのブルク劇場でモーツァルトの歌劇「コジ・ファン・トゥッテ」が初演されました。晴海の第一生命ホールに「コジ」が響いたのは、その初演から230年目に当たる2020年1月26日。モーツァルトが生まれたのは、1756年1月27日。それから224年後の1980年1月27日に、日本モーツァルト愛好会が創設されたのだそうです。ということは、今年が愛好会にとって創立40周年を意味し、本公演は愛好会創立40周年記念例会でもありました。新春を寿ぐと同時に、愛好会の40年も同時に言祝ぐことになりました。

私はこれまで何度か愛好会の例会に参加させていただきましたが、会のモットーである『ツウでも、ツウでなくても楽しめる会』に相応しく、会場は和気藹々とした雰囲気になります。この日も700の客席が埋め尽くされるほどの盛況で、個人的に良く知る顔にいくつも出会うことが出来ました。やや早めに晴海入りしましたが、既にホール前には開場待ちの長い列。日本人の癖として、つい列の最後の並んでしまいます。手渡されたプログラムも充実したもので、18ページから成る小冊子も全て愛好会会員の手作りと思われれます。「あらすじ」や作品に纏わる様々な評価が紹介されていましたが、出演者諸氏からのメッセージ「私にとってモーツァルトとは」というコーナーが秀逸。

如何にモーツァルトが演奏家にとって大切な存在であるかが、改めて確認できました。

また神戸モーツァルト研究会代表の野口秀夫氏が寄せられた一文は、恐らくプロフェッショナルにとっても貴重な資料になりそう。タイトルを「コシ」と読むか「コジ」と発音すべきか、はてまた「コスィ」か「コズィ」か、から始まり、モーツァルト作品はコピーだらけという博覧強記のテーマまで、開演前の暫し、プログラムに読み入ってしまいました。プログラムには1枚のチラシが挟まれており、出演者変更のお知らせ。フェルランド役を予定していた小堀勇介が健康上の理由で降板し、上記の渡辺康に交替する由。プログラムには小堀氏と印刷されていましたから、かなり急な交代劇だったと思われます。実際に舞台を見終わって分かりましたが、実力も経験もなければ容易ではなかったはずの代役。渡辺はスペインで同役を歌っており、見事にフェルランドを演じていました。降板した小堀は、一昨年の日生劇場「魔笛」のモノスタースで注目していたテノール。期待の一人でしたが、今回は止むを得ないこと。スターは、別のスターの代役から羽搏くのが音楽界の常と受け止めましょう。事前に小芝居がある、と聞いていましたが、どうして大芝居と言ってよいほどの本格的な舞台。アリアや重唱はもちろん、レシタティーヴォもイタリア語で、字幕は舞台奥の壁面に映し出されます。

その字幕も単なる対訳ではなく、本公演の現代風アレンジに合わせたもので、オリジナルでしょう。プログラムには字幕製作者や演出家の名前は明記されていませんでしたが、恐らく出演者や愛好会有志による手作りバージョンだったものと想像します。

愛好会は言わばアマチュアの集まり。日本はどの分野でもそうですが、アマチュアの熱意が時にプロフェッショナルを上回るような成果を出すことがあります。それを思うと、舞台の進行中、思わず目頭が熱くなるのを感じてしまいました。

現代風アレンジと書きましたが、舞台はナポリではなく、国籍不明(もちろん日本でしょう

が)のバーのような設定。バーテンダー(デスピーナ)が座るカウンターとストールが4脚という簡素な舞台。4は、もちろん二組のカップルの象徴でもあります。登場人物の衣裳も自前なのでしょうか。フェルランドとグリエルモはゲームオタクと軍事マニアという設定で、変装後もアルバニア人ではなく、マッチョとチャラ男と読み替えられます。出演者たちがアイディアを出し合う内に興が乗り、現代の若者たちのアクションをも取り入れた結果の「コジ」と見ました。

私がこれまで生演奏で接したことがあるのは二人だけ。フィオルディリージの増田は実相寺演出のパミーナでしたし、コバケンの第9で聴いたこともあります。グリエルモの青山は日生劇場のレポレルロやパパゲーノで、また神奈川県民ホールの人オランダ人で客席を沸かせた二期会のヴェテラン。

第1幕の難曲「岩のように動かず」を安定した歌唱で見事に歌い上げた増田、第2幕の「恋はくせもの」でドラベッラのキャラクターを巧みに歌った向野を筆頭に、6人の歌手たちは歌唱力はもちろん、バランスも見事で、あっという間の3時間でした。個人的には演技も抜群のデスピーナ九嶋が大収穫。オーケストラから合唱まで、一人でピアノで表現した朴も大健闘。それにしても声楽の威力はナマで聴いてこそ。今回のようなピアノ伴奏では、却って声の力、魅力を120%楽しめることになるのでしょうか。押川ドン・アルフォンゾの登場第一声から音楽のパワーに圧倒されてしまいました。これでオーケストラと若干の合唱が入り、セットを少し付け加えれば本格的な舞台公演になるでしょう。

終演後の拍手喝采も熱烈なもので、客席も演奏会を創り出す重要な要素。私は僅かしか体験していませんが、モーツァルト愛好会としても40年間の総決算とも言える大成功だったのではないのでしょうか。改めてアマチュアとプロフェッショナルの協力が生んだ成果を満喫、過去でも未来でもない豊かな時間を

体験できた空間でした。

※「クラシカル・ウォッチ」／白柳和男さん
(メリーウィロウさん) のブログ



中村 至 (元愛好会会員)

2020 年 1 月 26 日の日本モーツァルト愛好会第 483 回例会は、創立 40 周年記念公演として晴海 (東京都中央区) の第一生命ホールで開催された。出し物はオペラ・ブッフア『コシ・ファン・トゥッテ』(女はみんなこうしたもの) K588 で、「19 世紀の駄作から 21 世紀の傑作」(堀内修) となった喜歌劇の全曲である。駄作というのは、浮気をテーマにしたこのオペラに「嫌悪感を感じる」というベートーヴェンを筆頭とする 19 世紀の風潮を指す。

イタリア語をやる娘を 18 世紀の言葉と現代語を比べられると誑かして誘い、久しぶりに参加した。会場は全 767 席の立派な中規模ホールで、音響的にも充実している。愛好会の会員数からすると、破格の大きさである。ところが、なんとそれが 7 割ほどの入りである。永竹由幸氏によれば、コシはダ・ポンテ三部作のオペラ公演で最も切符が売れぬそうだ。会員以外にも参加を呼びかけたであろう、関係者のご苦勞が思いやられる。

オケはさすがに無理で、ピアノの朴令鈴さんが一人で登場しいきなり開演だ。序曲が終ると男性陣 3 人が登場し、フェランド役の渡辺康さんが歌いだす。出演予定の人が急病で急遽代役に立ったのだそうだが、この役は経験があるとかで練習不足を感じさせない。

La mia Dorabella, capace non è (そんなこと、ドラベッラはできないぞ)、士官フェランドのセリフである。相思相愛の人がいるというのは本当に楽しいものだといわんばかりの、浮き浮きした旋律である。続いて同じく士官で姉の方の婚約者グリエルモが La mia Fiordiligi, tradirmi non sa (僕のフィオルディリージは裏切るなんてことは出来ない) と歌う。最初はソソーソミで、次はミミーミドと 3 度

進行である。ここのようにずれることもあるが、重なところも多い。コシには有名なアリアこそ多くないが、重唱に優れた曲が多い。出だしの私のドラベッラというところに定冠詞の la がどうして付いているのかと思ったら、婚約状態ではまだ親戚になっていないからだそうだ。なるほど 4 番の二重唱では、sorella (妹) と単に呼びかけており冠詞は付いていない。

8 番の合唱はピアノだけでやるほかはなく、物足りぬ。偽の出征を見送る 10 番の三重唱は、とりわけ美しい。desir (祈り) のところの不協和音については、アマ通 4 号で既に触れた。変装し相手を取り替えての口説きが始まるが、なかなか成功しない。二人の士官は「ああ、おかしくて心臓が破れそうだ」と賭けが勝利に終ることを確信する。しかし、老哲学者ドン・アルフォンソは、約束の期限は明日の朝までだと釘をさす。第 1 幕の終曲はドタバタだ。士官二人が毒薬を飲むふりをしたり、買収された小間使デスピーナが磁石を取り出してその治療らしき処置をする場面は、演出の見せ場である。

姉フィオルディリージ役の増田のり子さんには創立 20 周年記念公演でも、モテット『エクセルダーテ・ユビラーテ』K165 を歌ってもらった。例のアレルヤのある曲だ。彼女の歌う 14 番の「岩のようにじっと動かず」は 10 度の跳躍もあり、難曲だ。ソプラノ泣かせの低音もある。

幕間に紺野信寿会員が 2 階席まで来られ、旧交を温めた。2009 年紺野氏らと北イタリアを列車で移動したとき、このオペラの姉妹の出身地フェラーラを通過したのを思い出した。姉妹がなぜ遠く南イタリアのナポリで生活していたのかは、わからない。福田赳夫が総裁選で負けた 1978 年、快晴のナポリで日曜を過し月曜の予定に合わせミラノに飛ぼうとして空港に行ったら、ミラノが霧のため欠航とわかった。夜行列車を余儀なくされ、南北間の距離を実感した次第。関係ないがそのと

きナポリでナポリタンを食べたが、あまりうまくなかった。

第2幕は19番のデスピーナの aria「女が15にもなれば」から始まる。九嶋香奈枝さんのデスピーナは気に入った。コケティッシュとはこのことか。声量も豊かで、2階席後方でもよく聞こえた。23番の二重唱でまず妹のドラベッラが陥落する。「何だか胸にヴェスヴィオ火山があるみたいだわ」。グリエルモはハートのペンダントを贈る代わりに、ドラベッラからフェランドの絵の入ったロケットを貰う。恋人を乗り換えた証だ。「ああ、心も愛情も生まれ変わった幸せ」。結婚式の場面の後で、このロケットが小道具として使われる。

フェランドの歌う27番のカヴァティーナ Tradito, schernito（裏切られ、嘲笑されて）は省略されたか。このあたりドラベッラが裏切ったと知ったフェランドは怒り狂うが、一方グリエルモは有頂天になっている。だが、ドン・アルフォンソは決着は明朝だぞと再び念を押す。

さて姉の出番である。不貞の罪を犯さないように軍服を着て戦地に赴く覚悟を固めたフィオルディリージに、フェランドは「あなたの心か、私の死か」と迫る。29番の二重唱は素敵だ。そして遂に「あなたが勝ったわ。お好きのようにしてください」。ドン・アルフォンソが不貞の彼女らをありのまま受け入れなさいと士官らを諭し、コ（ここで四分休符）シ ファン トゥッテ（女はみんなこうしたもの、野口秀夫氏によると co と si が離れているから s は濁らないそうだ）と歌い、二人がいやいや唱和する。

二組の結婚式が合同で行われる。グリエルモだけが「毒を服めばいいのに、恥知らずの女狐め」と毒づく。結婚証明書に署名した途端に、思ったより早く帰還してきた兵士たちの合唱が聞こえてくる。姉妹は大慌て。種明かしがあって「ものごとすべて理性でかたづけ、人の善い面のみ見ている者は幸せ者よ」

と大団円。ダ・ポンテの台本の故に、このオペラが不評だったとは信じられない。最後にアマ通4号で書いたことをもう一度繰り返す。それにしてもコシをまだ聞いたことのない方が羨ましい。今からこの傑作を初めて耳にできるのだから。



女性／60代

演奏会形式のオペラでしたが、中々聴き応えのある演奏で楽しめました。小堀さんに残念だった事伝えましたら、本人も大変申し訳なかったとメールが来ました。代役の渡辺 康さんは私がついこの前オペラ『ガラスの仮面』の初日に聴いた方でした。3日前に交代を告げられたらしいですが、良く頑張っていました。青山さんはあんな格好で驚きましたが、流石に声は素晴らしかったです。女性陣も素晴らしかったですね。（オペラファン）



男性／70代

楽しいオペラを堪能出来、ありがとうございました。皆さん歌唱力が凄く、声の質も素敵でした。また。ピアニストも素晴らしかったですね。楽しいひと時でした。（アマチュアのチェリスト）



男性／60代

初めてのオペラコンサート、軽妙で分かり易い字幕のお陰で楽しめました。出演者の中では特に姉役の女性と、代役の男性が良かったように思います。



女性／60代（俳人）

お話は他愛ないものですが、歌が素晴らしかったので堪能しました。お隣の席の姉妹の方は降板された小堀さんファンで、とても残念がられていました。私は代役の渡辺さんも声に艶があって良かったです。



女性／50代

アキバ系のポッチャリ男子の美声には笑いま

した。楽しい音楽会でした。



女性／50代（俳人）

音楽的にも素晴らしいし、若い日本の歌手の水準の高さを感じました。演出も面白かったです。さらに、オペラをピアノひとつで支え切った、強靱なピアニストにも感嘆致しました。本当に堪能させて頂きました。（オペラファン）



男性／70代

歌手の皆様は歌唱・演技共に素晴らしかった。（6人共甲乙付け難いですが、私は取り分けフィオルディリージの増田のり子さん）最前列ほぼ中央の席で目や手の細かい表情・動きや息継ぎの生々しい音まで子細に味わいました。しかも女声陣は皆さん中々美人・キュートでそれも良かったです。（笑）急遽代役に立たれた渡辺さんは1幕では高音がちよっと不安定な感じがして心配しましたが、2幕に入って絶好調になった感じで良かったです。ピアノも歌唱との呼吸がピタリ合い、並々ならぬ技量を感じさせました。演出も奇抜さが（家内は幕開けフェルランド・グリエルモ二人登場の場面で一体何が始まったのかと度肝を抜かれたそうです）違和感が無く面白く、それに合わせたユーモアに富む字幕にも時々ニヤニヤでした。オーケストラではない分、声の精妙なアンサンブルが際立ち、「アンサンブル・オペラ」コジを一層純粋に楽しめた感じです。（クラシック音楽ファン）



男性／70代

今迄経験した事のない素晴らしい世界とで出会いました。素敵でした。□（オペラは初めての方）



女性

初オペラ観劇、字幕付きだし設定が男性士官がオタクの二人、女性姉妹はキャバ嬢にと現代風にアレンジされた演出も分かり易く面白かった。やはり生舞台はいいなあ。



男性／60代

初めてのオペラ鑑賞でしたが、声楽家の皆様の声量・音質の素晴らしさに圧倒されました。オペラに興味のある友人もレベルの高さに驚嘆しておりました。（経営コンサルタント）



男性／70代

初めてのオペラゆえ、文明開化の思いでした。歌手の方の声量に圧倒され、脳が浄化されたように思います。サラリーマン時代にはストレス解消のためモーツァルトを始めクラシック音楽を聴いて自宅で鬱憤を晴らしていた事も多くありました。



女性／80代

休みなく熱唱される6人の歌手と、弾き続けられるピアニストのエネルギーに圧倒され、寒さなど吹っ飛びました。（作家）



男性／70代

日本のオペラとは如何なものかと思っていましたが、認識を新たにしました。あの高いレベルのものが安価で楽しめるのは破格の企画ですね。テノールの方も直前に代役を立てられての出演とは本当に驚きました。コジの経験がある方の方ですが、流石はプロ、凄いものですね。比べ物になりませんが、我が合唱団でドイツ語の曲を全曲覚えるのに半年も掛かっているのが全く恥ずかしい次第です。（学生時代は合唱サークル所属／N響定期会員）



女性／40代

素晴らしい演奏会。久しぶりにモーツァルトのオペラを堪能させて頂きました。（ピアニスト）



女性／80代

最近オペラ鑑賞の機会が無かったので、久しぶりに楽しいひと時でした。



男性／70代

モーツァルトのオペラは楽器演奏とはまた違った味わいで楽しく過ごさせて頂きました。（ギター演奏が趣味の方）



女性／40代

オペラは斬新な演出で面白かったです。



男性／70代

渡辺 康氏をはじめ歌手のレベルの高さに感動しました。



男性／70代

至福のひとつを楽しませて頂きました。同じ合唱サークルの大先輩（88歳）もソリスト達の力量に感心していました。



女性／60代

合唱仲間の友人から「歌手の方々が素晴らしく本当に楽しませて頂きました。代役の方は直前の交代にも拘わらず素晴らしくて、流石はプロと吃驚しました」とのメールを受信されました。（ご本人はご欠席）



女性／60代

楽しく鑑賞させて頂きました。素晴らしい出演者の方々でした。



男性／80代

「コジ・ファン・トゥッテ」は役者・内容・入場者数など申し分のない最高のイベントでした。



男性／60代

愛好会・出演者の熱意が感じられる素晴らしい演奏会でした。モーツァルトは如何なる状況でも演奏する熱意があると、素晴らしいモーツァルトになりますね（音楽マネジメント会社代表）



女性／50代

歌手の歌声が気持ちよくこのまま聴きながら眠りたいなあ～と思いながら、字幕も読まなくてはいけないしと目を開けたり閉じたりしていましたが（すみません）楽しく拝聴する事が出来ました。あんな所に字幕が映るなんて面白い！とオットも興味津々喜んでいました。（ご主人は写真家）



女性／60代

2幕などあっという間でした！楽しめました！女性お美しくて！私共は真ん中通路挟んで最前列ステージ向かって左側におりました。

脚をのばせてラクチン。普段は「つい寝ちゃったわ」の友人達もしっかりり覚醒していたようです。字幕がモダン？でつい笑いました。（合唱仲間のご友人と来場されました）



女性／50代

え～っとふくよかな男性がタッチのようだと友人と話をしていた面白かったです。初めゾーンズで出て来た時は「えっ？」とちょっと思いましたけどね。□友人も面白かったと言っていましたよ♪



男性

凄いの聴いちゃった、6人共美声で技巧も確か、声量十二分。ピットのない小ホール前方だけど鼓膜を突き抜けて腹で聴く感じ。至福。※新国「コジ」今日の6人に勝てる？コジこそオペラの中のオペラ、ドン・カルロよりいい。びわ湖も行くけど小堀様早く良くなって。小堀勇介を聴きにルンルンで向かうと降板。昔メトのコジでデスピーナのバルトリが落馬でキャンセルした時に近い衝撃、大体落馬って何よ・・・絶望して帰ろうかと思う。オタクとキャバ嬢への読み替え演出。青山 貴と代役の渡辺 康がオタクファッションで登場□フィギュアを握りしめた青山 貴が歌い始めると凄まじい声量。朗々たる低音の当たり、目の前にヲタク化したヴォータン出現。なんじゃこの凄さ。

代役の渡辺 康は軽く明るく濁りのない澄んだ響きで中音が輝くように当たる、うってつけの適役。押川も芯のある美声。

増田のり子／様式感の確かな品格のある Sp、向野由美子／薄く金属質の響きがする素晴らしい美声、九嶋香奈枝／ファニーな響きを巧みに生む適役のスープレット。6人共超ハイレベルで異様なアンサンブル□朴 Pf も心得た

伴奏、実は演出も繊細で良かった。すごい！！
(IKATEN のハンドルネームの方のブログ)
注：※新国「コジ」は本年3月の新国立劇場での公演の事／デスピーナは高橋薫子さんで、カヴァーが何と九嶋香奈枝さんです。



男性／70代

素晴らしい生声とピカピカの会場、素晴らしかったです。家内ほか4名で鑑賞しましたが全員大満足でした。



私の ケッヘル番号

マイナンバーK.543:交響曲第39番へのこだわり

K.543 高橋 勇

いつのころからであろうか、12進法が好みになった。それはつまり12を底とした約数・倍数(3、6、24、36・・・)へのこだわりである。

なぜ12進法があるのか。詳しいことは知らない。

聞くとところによれば、朝太陽が地球上に顔を出し、出切るまでの時間は2分(太陽のサイズ)、1日は2分の1440倍だそうで、1440を60で割ると24時間、古代バビロニア人がこの太陽のサイズをベースに1日を24時間にしたという。バビロニアのベースは60進法なので、1時間も60分に定めたそう。

また12という数字は西洋音楽の音階(半音階数)と同じ数であり、クラシック音楽愛好家にとって意味は大きい。近現代音楽には12音技法という作曲技法もある。

前置きはさておき、わがケッヘル登録番号「交響曲39番変ホ長調K.543」も実は偶然にもそれに呼応している。

第39番の数を足すと12、K.543も足すと12、変ホ長調のフラット数は3つ。最後の交響曲も3曲のセットであり、ハイドンセット等にみられるように6曲単位のセットも多い(最も6、12曲のセットはバッハはじ

め多くの作曲家に見受けられ通常形態であるが)。またMozartのスペルも6文字であり、いずれもこだわりを満足させてくれる。蛇足ながらわが生年月日も足すと36、姓名の字画は36画、気分のいい完結感である。そんなこだわりがあるので、例えば毎日やっている自己流体操の1パターンの回数も6、12、その倍数でないと気持ちが悪い。病的なほどではないにしても。

ただこれらはこじつけであり遊び心であり、交響曲第39番をマイ・ケッヘルナンバーとして登録した本当の理由は、やはりこの作品が最も好きな曲の一つであり、全曲を通して、また各楽章毎になんとも好きでたまらない。この曲の完成度、明朗で格調は高く、第一楽章の序奏付きなのも好みの形式だし、第二楽章の「白鳥の歌」の美しさ、第三楽章メヌエットの軽妙なトリオ、第四楽章はモーツァルトの上機嫌なおしゃべりを思わせる。また変ホ長調(ハ短調)は、理由はさておき究極的にわたくしの最も好きな調性である。(変ホ長調は古くから三位一体に通じると言われている)

これからも交響曲第39番の住人であり続けたい思っている。(令和2年1月)



私のK番号

K.425 朝吹 英和

私のK番号は交響曲第36番 ハ長調「リンツ」K.425です。モーツァルトの主要な交響曲には第1楽章が序奏で開始される曲が第36番、第38番、第39番と3曲が並んでいます。この「リンツ」に始まる交響曲を序奏で開始する書法は先輩のハイドンの影響とされていますが、3曲はそれぞれに趣が異なっており、多彩なモーツァルトの音楽に魅了されます。

荘重な序奏に引き続いての活気に溢れた第1楽章、第2楽章は緩徐楽章には珍しくトランペットとティンパニが採用され、展開部での短調への転調もあって陰影が深く、典雅な

第3楽章のメヌエットを経てプレストの終楽章では正に時間を追い越して疾駆するモーツァルトのエネルギーが全開して圧倒されます。コードを締めくくる躍動感に満ちた付点リズムの響きから新婚生活の喜びに溢れたモーツァルトの高揚した気分が伝わって来ます。作曲期間は僅か数日であったと推定されていますが、音楽の密度の濃さや振幅の大きさにモーツァルトの集中力の凄さを感じます。

「もの淋しい秋の気配というよりも、むしろ芳醇な美にあふれたこの交響曲は、一度聴いただけでは、個人的な感情を深く描きこんだ作品とは思えないかもしれない。だが、まさにそのような美を紡ぎだすことこそ、モーツァルトの個人的な喜びであり、気晴らしだったのであろう。その夏、首尾よく里帰りをすませたモーツァルトとコンスタンツェはウィーンに残してきた息子が死んだことも知らずに——リンツで暖かいもてなしを受けた。二人にとってこの体験は、あわただしいウィーンの生活に戻る前の、愉快的幕間劇のようなものだったにちがいない」（マイケル・レヴィ著『モーツァルト—光と影のドラマ』より）

私の「リンツ」の愛聴盤はオトマール・スウィトナー指揮／シュターツカペレ・ドレスデンのもので、しなやかさと推進力のバランスが良い格調高い名演だと思います。（1968年録音）

その名の通り、1783年10月末～11月初めにかけて僅か数日の内にリンツで作曲されたものと考えられています。モーツァルトには都市の名前が付けられた交響曲として、第31番 二長調 K. 297「パリ」、第38番 二長調 K. 504「プラーハ」があり、高橋 勇さんによって第39番 変ホ長調 K. 543は「ウィーン」と命名されました。（素晴らしいネーミングですね）

余談ながら幼少の頃からヨーロッパ各地を訪問したモーツァルトですので、私は他の交

響曲にも名前を付けてみたいと思いました。記念すべき交響曲第1番 変ホ長調 K. 16は8歳の時にロンドンで作曲されましたので「ロンドン」です。最も頻繁に訪れたイタリアでは自筆譜の残っている第13番 へ長調 K. 112に「ミラノ」と命名したいと思います。交響曲第14番 イ長調 K. 114から第30番 二長調 K. 202までの交響曲は全てザルツブルクで作曲されています。どれか1曲に命名するのは悩ましい所ですが、私の好きな交響曲第29番 イ長調 K. 201が「ザルツブルク」です。作曲当時17歳だった青春の輝きと共に第4楽章のコードでのホルンの木霊には何処か遠き日への思いが籠っているように私には感じられます。モーツァルトには幼少期にハーグやローマで作曲された交響曲もありますが、この際は割愛しましょう。

旅人としてヨーロッパ各地を訪問して様々な文化を吸収したモーツァルトの街に因んだ交響曲シリーズ、「ロンドン」・「ミラノ」・「ザルツブルク」・「パリ」・「リンツ」・「プラーハ」・「ウィーン」のラインアップは如何でしょうか。

そして、モーツァルト最後の交響曲第41番 変ホ長調 K. 551「ジュピター」は都市の枠を遥かに超えて宇宙空間に飛翔したのでした。



我が町に来た？

モーツァルト と モーツァルト本



K.279 高橋 郁代

BSプレミアム クラシッククラブをご覧になったことがありますか。昨年10月、我が町に「アンサンブル天下統一」が来訪。そのコンサートが12月13日に放送されました。ディヴェルティメント 変ホ長調 K.563が後半に演奏され、夢見ごちのま帰宅。

“かつてこの世で聞くことのできた最も完全

な、最も洗練された三重奏曲”アルフレート・アインシュタインーとの言葉通りです。

アマデウス通信№54で宮田さんが“追悼!”を寄稿されたように、磯山先生の愛好会登壇を、「モーツァルトあるいは翼を得た時間」東京書籍出版のレベルが高かったのも、どんなお話が聞けるかと切望しておりました。また、池内 紀さん「モーツァルトとは何か」は、モーツァルトの生涯を何冊読んでも、コンスタンツェへの手紙を読むにつれても、苦しくて苦しくていたのを吹き飛ばす「彼はいい時代に死んだ」の一説を載せていました。独文学者ならではの文化、時代、風俗の知識に裏打ちされた語り口調の、目から鱗の話でした。亡くなられ残念です。

2018年に青土社出版 ライアンダ・リン・ハウプトの「モーツァルトのムクドリ 天才を支えたさえずり」は、ムクドリを自宅で飼った野生動物保護に携わる方の考察で、モーツァルト考で最新のものです。

アマデウス通信で以前紹介されたかもしれませんが、「リリー、モーツァルトを弾いて下さい」河出書房新社出版 多胡吉郎 著は、モーツァルト弾き名手がジャワ日本占領時捕虜になり、戦後日本に来てくださる迄の話で、感慨深い本でした。

図書館で小林秀雄の愛読書として紹介された中の一冊、「モーツァルトへの旅」とんぼの本 新潮社 木之下晃・堀内修 著が、モーツァルトの旅先の写真満載で分かり易くすごく楽しい本でしたので、次々と本を読み出しました。

「モーツァルトの食卓」朝日新聞出版 関田淳子 著は、モーツァルト時代の食について書かれ、モーツァルトの好物（レーバークネーデル）やセーヌ川の水質、街の衛生状態等、なるほど...と感心しました。

「モーツァルト オペラのすべて」平凡社新書 堀内 修 著

「モーツァルト 光と影のドラマ」音楽之友社 マイケル・レヴィ 著

「素顔のモーツァルト」音楽之友社 石井 宏 著

「モーツァルトの手紙（上）（下）その生涯のロマン」岩波文庫 柴田治三郎 編訳

「モーツァルト 運命と闘った永遠の天才」岩波ジュニア新書70 柴田治三郎 著

— モーツァルトのあのひよわな体に天からあたえられていた力は、ただただ美しい物を作り出すこと、人を愛することに費やされただけで、この世を巧みに生き抜くことなどは、考えるいとまもなかったのである。—と独文学者柴田さんは書いていました。

「モーツァルト最後の四年 栄光への門出」春秋社 クリストフ・ヴォルフ 著

まだまだ沢山ありますが、変わったモーツァルト本の— 猟奇的サスペンス?—

「ケッヘル」上・下 中山可穂 著

「モーツァルトは子守唄を歌わない」森雅裕 著、

「ウィーンのモーツァルト史跡探訪」ヘルムート・クレッチマー 著

「コンスタンツェ・モーツァルトの結婚」ヴィゴー・ショークヴィスト 著

「フリーメイسنとモーツァルト」茅田俊一 著

モーツァルト自身が読んだと思われる本千夜一夜物語やロビンソン・クルーソー、オディッセウスも摩訶不思議でおもしろいと思います。

ピアニスト久元祐子さん（愛好会第480回例会出演）の Web サイト Mozart、「モーツァルトの旅」1～4ではモーツァルトが過ごした都市を年代順にたどっており、美しい絵や写真が添えられて、分かりやすく、深いモーツァルトの生涯を知ることができます。

「モーツァルトのクラヴィーア音楽探訪—天才と同時代人たち」

「モーツァルトのピアノ音楽研究」音楽之友社

「原典版」で弾きたい!「モーツァルトのピアノ・ソナタ」アルテスパブリッシング社

等 多数の著作もあります。

世の中にはモーツァルト好きが一杯。たくさんの方の古今指揮者に愛されているようです。手塚治虫の「リボンの騎士」の主演は、ケルビーノの印象がモデルとか。

ザルツブルクを訪れた折の東山魁夷の言葉「モーツァルトの歌が聞こえる」には、その感性にしばれます。

思い付くまま書きましたが、楽しいモーツァルト本が出たら皆様、教えてください。

【 新会員の紹介 】



- ① 氏名；小田切 啓一
- ② 住所；東京都練馬区
- ③ 紹介者；日本モーツァルト協会のオペラサークルにて愛好会の方と知り合い紹介
- ④ 入会のきっかけ；
＜一緒にやりませんか＞とお誘いを受けました。2019年11月の例会に伺いました。
- ⑤ ケッヘル番号；
K.596（歌曲：春へのあこがれ）
- ⑥ モーツァルト歴；小学校の音楽の教科書＜11歳＞にありました。かれこれ60年ほど
- ⑦ 会に何を期待しますか；
初期のころのオペラ。たとえば第一戒律の責務 K.35 とかアポロとヒアチントス、K.38 などあまり演奏されない曲に期待
- ⑧ 好きな曲；LP のレコードを買ってもらったのがベーム指揮の魔笛 K.620、フィガロの結婚、フリーメイソンのための音楽など
- ⑨ 趣味；主に中世ヨーロッパ音楽で古典派までを中心にバッハ、ヘンデル、J.C.バッハ、モーツァルトの周辺の作曲家、たとえばマンハイム学派の曲
- ⑩ その他；モーツァルト協会は海老沢敏先生や属先生のころイイノホールの時代から一時期仕事の都合で離れていましたが定年後、再度入会したのですが、私にとりまして女房(久子)とモーツァルトは一生の支えです。



第 481 回例会だより

日時：2019 年 11 月 10 日

報告：K.134 桐生 雅明

11 月例会は光が丘美術館で「モーツァルトの万華鏡 ～ソプラノとテノールが誘う甘美な世界～」と題し、針生美智子さん（ソプラノ）、望月哲也さん（テノール）、高田恵子さん（ピアノ）の3人が出演しました。

「クローエに K.524」、「ラウラに寄せる夕べの祈り K.523」といったリート、「ドン・ジョヴァンニ」からドンナ・アンナとドン・オッターヴィオのアリアと二重唱、魔笛からタミーノと夜の女王のアリア、コンサートアリアを3曲（K.217、295、418）、アンコールにバーンスタインの「ウェスト・サイド・ストーリー」から「トゥナイト」という曲目でした。リート、オペラ、コンサートアリアという3つの分野から魅力作を選んだ凝ったプログラムでした。

ドラマ性と難技巧と

全体を通して強く感じたのは、刻一刻と移り変わる人間の心理を、言葉と不即不離のしかも絶美の音楽で表現していくモーツァルトの桁外れの能力です。言葉は分からなくても感情の起伏がよく分かる気がします。

もう一つ感じたのは、モーツァルトの声楽曲には難技巧を要求するものがけっこうあることです。今回取り上げられたオペラや、コンサートアリアには「コロラトゥーラ」のアリアがいくつもありました。ドン・オッターヴィオのアリア「私の恋人を慰めて」は男性のコロラトゥーラといえるものです。また、コンサートアリア「私はあなたに明かしたい、おお神よ K.418」は、モーツァルトを振ってランゲと結婚したアロイジア・ウェーバーの為に書いた曲で、五線紙の3つ上の音が出てくる超絶技巧のコロラトゥーラです。

こんな難曲を楽しめるのも、針生さん、望月さんという第一線の歌手があつてのこと。高い技量と音楽性があつて初めてモーツァルトの声楽作品は輝きます。高田さんのピアノも雄弁で、オーケストラを思わせるような表現でした。オペラ伴奏の豊かな経験に裏打ちされていました。

針生さん、望月さん、高田さんへのインタビューから

司会 歌手やピアニストを志したきっかけは？

針生さん 小学生から合唱をやっていて、中学生のとき二期会の「セビリアの理髪師」を見て、歌手になりたいと思いました。プロになり二期会に入って、中学生時代に見たのと同じセットの舞台で演じたときは、歌手になって本当によかったと思いました。

望月さん 中学生のとき合唱をやって楽しくなり、素晴らしい合唱部のある高校に進学しました。高校でラ・ボエームのロドルフォを歌ったり、パヴァロッティーを聴いて憧れてこの道に進みました。

高田さん 母がピアニストでピアノが生活の一部になっていたので、自然にこの道に入りました。

司会 高田さんが伴奏するとき、特に心がけていることは？

高田さん 特にはありません。どんな音楽を演奏するときも同じです。

司会 皆さんにとってモーツァルトとは？

針生さん オペラデビューが魔笛の夜の女王でした。そのときの経験が強烈で、原点になりました。モーツァルトは演じるほど、学ぶほど深みが増し課題が見えてきます。

望月さん いろいろやってみた後、戻ってくる場所という感じです。プッチーニのような大きな音のオーケストラをバックに歌っていると、声を響かせることが中心になり、声のフォーカス（ピント）が合わなくなってきました。こんなとき、フォーカスを合わせるには

最適です。基本を確かめリフレッシュできる音楽です。

高田さん 歌の伴奏でモーツァルトを弾くようになり、オペラ研修所で仕事をするようになってからは必ず弾くようになりました。そこでモーツァルトをもっと勉強したくなり日本モーツァルト音楽コンクールに参加し、モーツァルトのソロの曲を沢山弾きました。そして、若いころは分からなかったオペラのキャラクターの感情表現が理解できるようになりました。

新コラム



リレー・トーク



K.527 吉田 智子

入会したのは、映画「アマデウス」公開後に到来した91年の没後200年の喧騒フィーバーが収束し、俄ファンが退出した頃92年9月でした。つまり、既に在籍27年の古株なのです。当時は、懇親会にも誘われず、ボッチ状態が4年ほど続きまして、現在の新入会員に対する歓待、厚遇？とは雲泥の差がありました。皆さんと親しくさせて頂けるようになったのは会計の補佐をさせて貰ってからです。

その後、運営委員を仰せ付けられ、PCのWordの奥深さと面白さに目覚め、例会チラシのデザイン担当となりました。マンネリを打破すべく、インパクトのあるチラシ作りを目指しております。作成にあたり心掛けているのは、演奏者の写真のイメージと似合った背景色を選ぶ事です。毎回違うようで、実は、パターン化されているのですが、全くイメージが浮かんで来なくて焦るのも度々です。今年の7月の例会チラシを例に取りますと『俊英の開く新しい世界・フォルテピアノとギターの協演』(朝吹代表が紡いだ言霊による素敵なキャッチコピー)そのタイトルに沿ってイメージを膨らませて色を選び、鋭角的、知的な雰囲気の色を採用しました。デザインのドラフト

が出来てからが実は大変なのですが、大変なのは私ではなく、文字校正、その他チェックをして頂く企画委員と例会担当者の皆さんです。文字フォントや出演者のお名前、日時、表記等、チラシ全体を厳しくチェックして頂いてから修正し、演奏者にもご覧頂き、要望があったら再度修正して、最後に朝吹代表のOKを頂いて、ようやく完成です。何度やっても一発OKとはいかなくて、至らなさを痛感しています。そうして、印刷係の吉野さんに原稿をpdf Cubeに変換して送信したら、チラシ作成終了となります。それからは、演奏家の出演コンサートに例会のチラシ挟み込みの依頼等、諸々の業務が印刷担当者の吉野さん、例会担当者のお役目になります。皆さんのご尽力と幾つかの過程を経て、やっとチラシが完成します。

作成段階で煮詰まらない時など、この仕事を辞めようかと頭を過ることがありますが、後数年はお任せ頂きたいのが本音でしょうか。そのためにもっと技術を磨いて精進していきますので宜しくお願いします。

ところで、モーツァット以外の趣味なども紹介するとの事でしたね。

長年の趣味は、野球観戦で最員のプロ野球チームを50年応援しております。例会の日にはスマホで勝敗をチェック、勝った日の帰りの電車内でニヤニヤしながら動画で試合のダイジェスト版を眺めるのが楽しいです。優勝のXデーを予想し、優勝試合を観戦したのも2度程あります。その他、運動が好きなので、筋トレも健康の為に日課となっています。ちょいハードになり過ぎて、腰痛再発！何事も程々にしないとイケませんね。

(次回は安原秀樹さんにバトンをお渡しいたします)



「神ってるモーツァルト」Ⅶ

K.425 朝吹 英和

一粒の砂にも世界を

一輪の野の花にも天国を見

君の掌のうちに無限を

一時のうちに永遠を握る

ウィリアム・ブレイク (松下正一訳)

モーツァルトと同時代に活躍した英国の詩人ブレイク(1757～1827)の詩『無垢の予兆』の一節である。

モーツァルトの音楽は一瞬の澱みもなく疾駆する。水滴によって構成される川の流れは休むことがないが、水は川から掬い上げられた瞬間に流れとしての生命を失う。流体の生命が正に流れの運動エネルギーの中に存在するようにモーツァルトの音楽は発見と躍動に満ちた瞬間の連続体が放射するエネルギーの中にその生命を宿しており、有機的な肉体感に満ち溢れている。標題性はおろか時には指向性すらも定かではないモーツァルトの音楽の魅力についてのオマージュは古今東西暇なく語られ記されて来たが、彫刻家である飯田善国(1923～2006)のものをご紹介したい。

「ベートーヴェンの音が一音から一音へと信じられぬほどのエネルギーの集積と集中として感じられ、空間に音の实在を作り出して行く」と述べる飯田は「モーツァルトの音は音のひとつひとつを取り出してみれば、エネルギーの集注と圧縮の結晶体としての重量感も实在感も感じられない。むしろ一音一音は透明で軽妙で敏速で光輝に充ちており、实在というよりは非實在的な光に近い」

として、更に「だがそれらが音のつらなりの連続体として運動する空間を作り出す時、それらは極めて有機的に感じられる。非實在的で有機的である」と結論付けている。(『私のモーツァルト』FM選書より)

音符の連なりの連続体である音楽が聴き手の中で空間性を獲得する例として私はベートーヴェンの交響曲第3番を挙げたい。第1楽章、決然たる意思の象徴の如く鳴り響く変ホ長調の2つの主和音に続いて低弦に登場する第1主題（ド～ミ、ソ～ド、ドミソド）はモーツァルトの歌劇『バスティアンとバスティエンヌ』K. 50の冒頭に酷似しているが、11歳頃の少年モーツァルトの音楽が台本通りに長閑で牧歌的な展開を示すのに対してベートーヴェンの音楽は勇壮かつ対位法的な展開を見せる。そして展開部から再現部、コーダにかけての湧き上がるように上昇する高揚感と迫力は恰も巨大な積乱雲が生まれるような迫力に満ちた空間性を獲得している。

一方、モーツァルトの交響曲第41番 ハ長調K. 551の第4楽章を聴くと、対位法的技巧とフーガの重層的な展開により輝きに満ちた広大な空間が感じられる。「輝きに満ちた広大な空間」・・・私には星座などの宇宙空間が想起される。ジュピターの命名は英国でハイドンを支援したザーロモンによるとされるが、ギリシャ神話の最高神ゼウス（宇宙を支配する天空神）に因んだネーミングは正に「名は体を表す」ものとして正鵠を射ている。ゼウスはローマ神話ではユピテル（英語ではジュピター）であるが、ゼウスとは明るく輝く空を意味するものと聞く。

葛飾北斎の傑作「神奈川沖浪裏」では巨大な波浪に翻弄される舟の先に冠雪した不動の富士山が遠望される。動と静、遠と近の重層的な時空を切り取った構図は瞬間は永遠に繋がる象徴であり、時間が空間に転位する瞬間を見事に表現していると同時に人間の力を遙かに超越した自然の力の表徴でもある。

また、ピアノ協奏曲第22番 変ホ長調K. 482ではモーツァルトのピアノ協奏曲としては初めてクラリネットが採用され、ピアノと木管楽器との掛け合いが絶妙な効果を上げ多彩な世界が展開されている。第3楽章の如

何にもモーツァルトらしい快活で生気に満ちたアレグロはピアノ協奏曲第23番 イ長調K. 488と並びピアノと木管のための協奏交響曲の趣がある。然しながら、ピアノ協奏曲第20番から第27番までの傑作の森にあって第22番は第25番と並んで最も演奏頻度の低い作品であるのが残念である。私も実演で接した回数は僅か2～3回にしか過ぎない。

第2楽章はハ短調のアンダンテで沈潜した色調の中でピアノのモノローグが歌われる。夕闇の迫った秋の景色が脳裏を掠める楽章であり、陽春の光輝く光景が目浮かぶ両端楽章と鮮やかな対比をなしている。父レオポルトの手紙によれば初演の際にはこのアンダンテがアンコールとしてリクエストされた。

ピアノソロでは謎に満ちた幻想曲 ニ短調K. 397を空間性を獲得した作品の一例として挙げたい。モーツァルトの自筆譜が残っていない上に1804年に初めて出版された楽譜は97小節で中断している。現在一般的に知られている最後の10小節の補筆がモーツァルトによるものか否かは未だ確定していないと聞く。

曲は分散和音のニ短調のアンダンテで開始され、やや感傷的な旋律と焦燥感のある楽句とが交錯しつつ進行する。半音階や休止符を挟みながら歌われるアダージョ部分では静寂な自然の中で物思いに耽るような気分で森や湖の景色が脳裏に明滅する。最後はニ長調に転調してこれぞモーツァルトともいふべき明るく軽快な調べのうちにコーダを迎える。明暗、静動、生死、浮沈などの両極を自由自在に往還するモーツァルトの音楽の凝縮した極致である。終盤の転調では森の中に射し込む春の柔らかな光が映像と共に実感される。

ブルックナーの交響曲第5番は低弦のピチカート の下降と上昇によって厳かに開始される。振子時計が時を刻むように、また一步一步階段を昇降するようにも響く音型が対位法的に展開され、密度の濃い緊張感の中で小休

止を迎える。

その直後、金管の強奏で突如出現するコーラル楽句は、光に包まれた神の姿を直視するが如き鮮烈な印象を与える。暗闇の世界から一挙に光の檜に射し抜かれるが如き眩い世界に転位する劇的な効果が素晴らしい。

モーツァルトの柔らかな光と対照的な強烈な光が屹立する空間を包み込んでいる。

音楽を聴いて映像が目浮かぶ、即ち音楽が空間性を獲得している作品の一例をご紹介したい。チャイコフスキーの交響曲第6番の第1楽章展開部では内面の葛藤が激烈な映像として再現され、シベリウスの交響曲第5番やブルックナーの交響曲第7番には森を抜ける風や輝く雪嶺、更には星座など雄大な自然の美しさを感じられる。また、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第1番においては瞑想的で静謐な世界と対照的にグロテスクで凶暴な世界が万華鏡の如く実在感を伴って目に浮かぶのである。

パルジファル「少ししか歩いていないのに随分遠くに来たような気がする」
グルネマンツ「ここでは時間が空間に変わるのだ」

ワーグナーの『パルジファル』第1幕、老騎士グルネマンツがパルジファル

(穢れなき愚かな若者)と共に聖杯が安置されている神殿に向かう場面での啓示的な対話の背景を流れる音楽は正に「時間が空間となる」神秘に溢れており、実演の舞台に接すると視覚と聴覚とのコラボレーション効果に圧倒される。

芸術から受ける感動は様々であるが、人間の精神が創造したがゆえにその本質は感覚的であると同時に精神的な深みを志向する。クラシック音楽は多彩な響きとリズムの変化、何よりも魅力的な旋律の美しさ、更にはソナタ形式や循環形式等劇的かつ緊張感のある重層構造によって、時間芸術でありながら空間

的な広がりのある時空にタイム・スリップする事が出来る。

音楽における空間認識について愛好会会員の勝間田さんがお書きになった文章の一節を引用させて頂きたい。

「モーツァルト様のディベルティメント NO. 15 K. 287の第4楽章のアダージョを聴いていると、やはり崇高な世界への誘いを感じます。音楽は時間と共に水平方向に流れてゆくように感じられるのですが、このアダージョを聴いていると音楽は垂直方向に上昇してゆき、時間が空間に変容してゆくが如く、徐々に逆円錐形に空間が広がってゆくような、まるで恋人たちが手に手を取り合って舞い上ってゆくような、もはや時間軸は消えて、恋人たちの愛が融合して開花し永遠に愛が流れてゆくような・・・世界を感じてしまいます」

(「アマデウス通信」第53号より)

音楽には不可視の時間を可視の空間に反転させる力が内在しているが、文字で構成された俳句は状況喚起力の強い季語の働きや、「切れ」によって印象鮮明な映像が読み手に伝わる。空間性の獲得こそ優れた芸術に通底する特徴なのであろう。時間の中に空間を現出させる力こそ「神ってるモーツァルト」を象徴しているのではないか。



ハ短調の陰り

中村 至 (元会員)

モーツァルトにはハ短調の曲が楽章(序奏のみのものを含む)単位で62ある。ハ短調では楽譜に変ロ、変ホ、変イとフラットが三つ付いていて、この点で平行調の変ホ長調と同じである。伝統的に、両端が変ホ長調の曲にハ短調の中間楽章が挟まれることが少なくない。

寄寓先のロンドンで書かれた交響曲第1番

変ホ長調K16が一例で、第2楽章アダージョがハ短調で書かれている。例のドレファミというジュピターテーマ^{*1}が7～10小節などのホルンに出ることで知られる。大指揮者カルル・ベームがこのあたりで思わず涙したとどこかで聞いたが、大の男、それもベームほどの世界的権威を泣かせるとは子供のくせにやるものだ。「展開部に入って、第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが互いにメロディーを模倣し合うあたりの哀切な響きを聴く時、私は8歳の少年の心からなぜこれが生まれたのか、不思議な気持ちにさえる」（井上太郎）。「ロンドンでお披露（16）目初のシンフォニー」『洒落風モーツァルト全集』。そんな色（16）ジュピターテーマじゃ出せません。

同じような例をもう一つあげると、ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲変ホ長調K364の第2楽章がある。「モーツァルトの作品の緩徐楽章で、この楽曲の美しさに最も心をうたれるファンも多いと思われます」（東京アカデミーオーケストラ）。「ヴァイオリンとヴィオラが颯々と響き合う美しさには聴き手を酔わすものがある」（井上太郎）。省みろ酔（364）って自分を失うな。まさにモーツァルト節である。特にヴィオラパートは単なる伴奏ではない。「サムフォ（364）ニー・コンセルタンテ極め付き」『洒落風モーツァルト全集』。

変ホ長調に挟まれるとしたが、同名調^{*2}のハ長調に挟まれることもある。交響曲ハ長調K96がそれで、第2楽章アンダンテがハ短調になっている。自筆譜がないので偽作扱いされることもあり、旧全集では番号を与えられていない。しかしアンダンテの旋律は同時期のオペラ（セレナータ^{*3}）『牧人の王』K206序曲の一部（こちらは長調）とよく似ているので、おそらく真作だろう。シチリアーノ^{*4}のリズムが使われているのも、同じ理由か。「ハ短調という調性の故もあって、前楽章とは全く異なる厳かで深みのある音楽となっている」（吉成順）。「シンフォニー様式論で苦

労（96）する」『洒落風モーツァルト全集』。黒（96）光りするほど楽器使いこみ。

ウィーンの一角（町の名は聞いたが忘れた）に1768年孤児院が設立され、女帝マリア・テレジアの臨席する献堂式に演奏される音楽



がたまたま訪れていた少年モーツァルトに委嘱された。ミサ曲ハ短調 K139『孤児院ミサ』である。終曲『アニヌス・デイ』（神の子羊）の前半を見てみよう。「3本のトロンボーンとテノールの独唱が、哀感をこめて十字架のキリストに思いをいたす。独唱、伴奏楽器の音型ともに表出にあふれ、ことに管楽器の減7の分散和音が悲痛な感情を体現する」（藤本一子）。『クレド』（我は信ず）の Crutifixus もそうだが、どうしてこんなに金管、特にトロンボーンとトランペットの使い方がうまいのか。「孤児院でミサ歌う子ら瞳黒（139）」『洒落風モーツァルト全集』。700人もいた子供は高度の音楽教育を受けたが、多くは青い瞳だったはず。うら若い作（139）者は指揮もミサ見事。僅か12歳のモーツァルトは当日指揮を任された。

ハ短調には歌の曲も多いが、その歌詞を見ると恐れとか、死とかが目立つ。モーツァルトがこの調性に持っていた感性が窺われる。そうしたものの一つにオペラ『クレタの王イドメネオ』K366の第24曲の合唱『ああ、おそろしい誓約だ！』がある。航海中に嵐に逢ったイドメネオが助かったら最初に海岸で会う人を生贄に捧げると海神に誓約して上陸したが、なんと会ったのは息子のイダマンテ。ことの成り行きを知った民衆が運命の恐ろし

さに声を揃え、3 連音符の伴奏に乗って合唱が響く。「合唱が単なる添えものに堕することなく、作品のダイナミックスを支える重要な柱となるに至っている」（吉田泰輔）。試みむ無（366）理でも嵐突き抜けよ。

晩年、といっても三十そこそこなのだが、の作に歌曲『ルイーゼが不実な恋人の手紙を焼いた時』K520 という短いが素敵な曲がある。バウムベルグという女流詩人が自らの体験を詞にしたとされている。歌詞大意は、熱い幻想によって生み出されなお前たち、憂鬱の子ら（手紙）よ、滅びるがよい。お前たちは激情の炎で生まれたが、私は今、お前たちを炎に返してあげる。あの人は私のためにだけこれを書いたのではないのだから。お前たちはあとかたもなくなるが、お前たちを書いた男は、私の心のなかでなお燃え続けることだろう、というもの。「たった1分半の曲なのになんという凝縮力」（オセンチルカ）。

「小曲にこんなに大（520）袈裟歌曲の名」『洒落風モーツァルト全集』。到着後触れ（520）ずにそっと保管して。

中には変り種もある。1 幕のジングシュピール^{*5}『バ스티アンとバスティエンヌ』K50 の第 10 曲『ディッキー、ダッキー^{*6}』は、占い師カラーが羊飼いのバスティアンに歌うむしろ愉快的な曲である。「私の子供の頃までであった「チチンプイ」のおまじないを思い出させる……重々しいこの調性が、ここではかえって滑稽に響く」（井上太郎）。登場人物の性格描写も見事である。「バスティアンこれ（50）ぞ少年モーツァルト」『洒落風モーツァルト全集』。その汚れ（50）羊飼いなら当たり前。

セレナードというとディヴェルティメント、カッサシオンと並んで娯楽音楽（機軸音楽）に属し、貴族の祝い事などで奏される。その典型はハフナー・セレナード K250 で、性格は明るい。ところが稀有のことに、セレナード ハ短調 K388（及びこれを編曲した弦楽五重奏曲ハ短調 K406）は短調で書かれている。メヌエットが一つだけとか僅か 4 楽章

からなるというのも、普通多楽章のセレナードとしては異色。「急いで夜曲を一つ、といっても管だけのために（さもないとお父さんのために使えたでしょうが）、書かなければならなかったの」（1782 年 7 月 27 日）と、交響曲第 35 番ニ長調 K385『ハフナー』（正確にはその原曲となる、現在は一部散失した第二ハフナー・セレナード）納品遅れの言い訳をしている。諸説あるが、この手紙で夜曲というのが本曲らしい。「ハ短調は劇的な調性であり、攻撃的なユニソノと抒情的な転換とが対立する調性である」（Einstein）。ユニソノとは何だかわからない。オーボエなどの目立つ場はなく、「ある楽器がスタンドプレイをすることは全く無いのです」（おたくらしゅく）。「セレナード爽や（388）かさからはほど遠く」『洒落風モーツァルト全集』。試みやや（388）がて哀しきハ短調。

未完のミサ曲ハ短調 K427『大ミサ曲』は、冒頭のキリエからして凄い。三ヶ尻正氏によると「泣く子も黙る」ほどである。「第 1 曲目冒頭部は、合唱により暗く重々しいハ短調で始まり、コンスタンツェが歌う^{*7} 中間部だけは対照的に神の光を思わせる変ホ長調に転じ、再び合唱に戻り暗雲が立ち込めたようなハ短調で消え入るように終わってゆく」（津田雄二郎）。「ミサ曲の歴史でこれほど烈しく、深い祈りはなかった」（藤本一子）。君が世に嘆（427）いてたのを思い出す。ザルツでコロレド大司教の下に逼塞していた頃は、宗教曲の型式にも種々の制約があった。

トリはピアノ・ソナタ第 14 番ハ短調 K457 に勤めていただこう。ピアノ・ソナタで最も好きな曲で、ベートーヴェンを思わせる重厚な出だしに始まる。勿論モーツァルトの方が先で、現にベートーヴェンはハ短調のソナタ（作品 10 の 1）第 1 楽章でこれを真似ている。「展開部では、冒頭の上昇音型は連続して四回も弾かれ、気分的高揚が頂点に達する」（久元祐子）。「カプリング吟味をしない（475）で横流（457）し」『洒落風モーツァルト全集』。

K475 は、本ソナタとしばしば組み合わせられる幻想曲ハ短調を指す。心地よい名（457）前のような出だしから。

他にも、フリーメースンのための葬送音楽ハ短調 K477（アマ通 38 号）、弦楽のためのアダージョとフーガ ハ短調 K546、歌劇『魔笛』K620 の第 1 曲『助けてくれ！助けてくれ！』（アマ通 21 号）などの佳曲がある。

*1 交響曲第 41 番ハ長調 K551『ジュピター』第 4 楽章の主要テーマで、生涯を通じ幾多の曲で使われた。

*2 主音、この場合はハ音、が共通する関係をいう。

*3 いささか学術的になるが、オペラ『コシ・ファン・トゥッテ』K588 の冒頭の三重唱に「セレナータ」という歌詞がある。

*4 6/8 拍子の付点のついたリズム。ピアノ協奏曲第 23 番イ長調 K488 の第 2 楽章（アマ通 11 号）が有名。

*5 歌芝居のこと。普通セリフが入る。

*6 この「魔法のことば」については、野口秀夫氏の詳細な解析がある「神戸モーツァルト研究会第 220 回例会」。

*7 ザルツブルグでの初演の際、キリエの中間部のソプラノ独唱 Christe eleison（キリストよ、憐れみ給え）で、新妻がソリストを勤めた。予め練習曲 K393（2 曲目）を与えておいて予習させたようだ。大ミサの他のソロはさらに難しいので、そこはプロにやらせたのではないか。



中村哲さんとアフガンのモーツァルト

K.488 ガーディナー・イズミ

戦乱や干ばつで荒廃したパキスタンとアフガニスタンで、多くの市民とともに人道・復興支援を行っていた中村哲さんが、昨年 12

月アフガニスタンで灌漑工事現場に向かう途中、武装勢力に襲われ凶弾に斃れた。私は、中村さんが戦乱のアフガニスタンの山岳地帯で医療活動を行い、そのうち井戸掘り、さらに灌漑事業に打ち込んでいるのを知っていた。医療より水の確保の方が優先度が高いのだろう、現地の実情に応じてそこまでやるすごい人がいる、日本の平和憲法を体現した人だ、という理解だった。とはいえ、私が知っていたのは、アフガンで活躍する一医師という一般名詞の存在でしかなかった。テレビの追悼番組で、中村さんが山道を馬で診療に向かう姿や灌漑事業で急流に取水堰を築く陣頭指揮をしている映像を見て、活動の一端を知った。私は「国境なき医師団」という西欧の合理主義に徹して医療支援活動を行う NGO の一員だと思っていたが、それとは対極的な存在だった。前近代的なアフガニスタン社会に身ひとつで飛び込み、泥臭く活動していた。

作家の澤地久枝さんが『文藝春秋』二月号に“中村哲さんがアフガンに遺した「道」”という追悼文を書かれていた。副題に「水を引いて六十万人を救った」とあった。そこでは、生い立ち、アフガニスタンにおける医療活動、灌漑事業に打ち込まれた様子といくつかのエピソードが語られていた。私はそこで始めて、固有名詞の中村哲さんを知った。中村さんの母は作家火野葦平の妹で、父は葦平の友人、母とは労働運動で知り合ったという。葦平の父は北九州若松港の沖仲仕を取りしきる玉井組の組長だった。このような境遇で葦平は起伏の激しい生涯を送ったが、中村さんは身近に接し、影響を受けたようだ。両親の意向で中学時代はミッションスクールに通い、洗礼を受けた。その後医師となり、医療に従事していたが、日本キリスト教海外医療協力協会から、パキスタンのペシャワール赴任の依頼を受けた。1984 年に家族 4 人で赴任し、現地で医療活動を始める。このとき、中村さんを支援するためにペシャワール会という NPO が設立された。以来、資金集めやボ

ランディアの派遣など、一貫して中村さんの活動を支えている。中村さんはペシャワール会現地代表という立場であった。

1986 年からパキスタン国内のアフガン難民への医療事業を始め、アフガン東部山岳地帯に三つの診療所を設立した。山岳地帯の村々は大抵が無医村なので、巡回診療を行った。医療活動は軌道に乗ったが、アフガニスタン全土を干ばつが襲い、2000 年に一挙に深刻化し、400 万人が飢餓線上をさまよう事態になった。清浄な水の不足で赤痢やコレラが急増、多くの子供が死んだ。急遽緊急食糧配給を延べ 15 万人に行った。中村さんは「病気はあとで治せる。とにかくいまは生きておれ」「百の診療所よりも一本の用水路」を信念に、2008 年までに飲料用井戸約 1600 本、灌漑用井戸 13 本を掘り、伝統的な地下水路 38 ヶ所を再生し、多くの村民の難民化を食い止めた。そして、自給自足が可能な農村の回復を目指し、灌漑事業、農業事業に取り組むことになる。2010 年ガンベリー砂漠まで 25km の用水路を完成させ、10 万人の農民が暮らしていける基盤を作った。以前の砂漠と緑におおわれた農地を対比するテレビ映像が印象的だった。

人道活動であっても、アフガンの地では様々な困難がつかまとう。現実とかけ離れて厳格なイスラム教、異なる民族・部族集団間、軍事勢力・軍閥の複雑な対立、封建的な身分制と長老支配など。日本人ワーカー 20 人、現地職員 260 人、臨時雇いを入れ約 1000 人の大所帯、組織運営や資金集めに悩みはつきなかつただろう。農村の伝統社会で事業を進めるため、まず長老会の了解を得る配慮をした。中村さんは、現地の人々が自前で施設の維持管理をするには土木機械を使う近代技術は不向きと判断して、つるはしやシャベルでの人海戦術に落ち着いた。そうした考え方から、取水堰や護岸工事に筑後川の江戸時代の治水工事技術を研究して取り入れている。そこで、江戸時代の人々の知恵のすごさに気づく。江戸時代人の心性を思い浮かべることによって、

現地の人の前近代的なしがらみや不合理も、親しみをもって了解できたのだろう。

アメリカの同時多発テロ後、米軍はタリバンに対し空爆をしかけ、用水路工事のそばを米軍ヘリコプターが編隊飛行する光景が日常化した。機銃掃射を受け、中村さんも流れ弾が脚に命中したことがあった。米軍は中村さんの事業活動にタリバンが混じり込んでいることを疑って、警戒したのだろう。

日本はインド洋に自衛隊を派遣するに当たって、国会審議で中村さんを参考人として招致した。中村さんは「有害無益」と強く反対された。アフガニスタンでは日本の平和憲法はよく知られ、日本人であることがわかれば、武装勢力も襲ってこない。だから中村さんは車に日の丸と JAPAN の文字を印刷していた。自衛隊派遣によって、日本は米軍の味方ではないかという不信感が生まれ、日の丸と JAPAN の文字を消さざるをえなかったという。澤地さんはここを強調したかったのだろうが、淡々と綴られている。

澤地さんは中村さんのモーツァルト愛好を伝えている。「こうした様々な困難と向き合う中で、先生を癒したのがクラシック音楽でした。とくにモーツァルトがお好きで、現地に立派なオーディオ機材を持ち込まれたそうです。……水道も電気もない土地ですから、自家発電装置を使って数時間だけ電気が使えます。この限られた時間を使って、音楽を楽しんでいたそうです。」私は書物や放送で、時々思いもよらないかたちでモーツァルト愛好者に会う。そして、感激する。しかし、今回は衝撃を受けた。中村さんの心にモーツァルトの音楽は、清冽な響きをもって届き、苦労を癒すだけでなく、元気を与え、勇気を奮いたたせるものであつただろう。それに比べ、私は安逸な日々のなかでモーツァルト聴き、水ぶくれした感動に小さな喜びを感じているだけではないか。衝撃のものは、崇高と卑小のコントラストにあつた。気を引き締め、耳を傾け、静穏な調べに伏在するエネルギー

ーから元気を取り出し、闘志を汲み取るように聴かなければと思った。

澤地さんは、中村さんが 3000m を超える山岳地帯を馬で移動中、鎧(あぶみ)に足が絡まったまま落馬して宙吊りになり、九死に一生を得たことを語っている。別な人の証言では、馬上でよくモーツァルトを聴いていたという。空を切り裂く白銀の峰々を背景に、モーツァルトの音楽はひとときわ光彩を放っていただろう。「天、共に在り」という信条の中村さんには、天空の音楽が降り注ぐように響いていたに違いない。これは映像からの私の連想である。「抜けるような紺碧の空、純白の雪の峰々、強烈な陽光、ここには天・地・人の壮大な構図を一望させる啓示がある。」と中村さんは語っている。啓示と聞くと私には、モーツァルトの音楽をこよなく愛した神学者カール・バルトの「モーツァルト音楽の黄金の音色と調べは、若い時代から福音としてではないが、福音において啓示された神の自由な恩寵の国の比喻として私に語りかけてきた」という言葉が思い浮かぶ。私は帰省の際カーオーディオでモーツァルトを聴きながら、山あいを抜け、突然日本海が眼前に広がったときの感激を思い出す。中村さんとは比ぶべくもないが、幾らかは似ていたのではないかな。

澤地さんは中村さんの「人の名前は忘れられる。しかし、用水路そのものは残ってゆく。……神とか、天とかおそらく自分にはできないことまでは強制なされないだろうというのが、私のささやかな確信で、『これだけやったから許してください』と言うしかないですね。それでいいんじゃないかと思います」という言葉で締めくくっている。地の塩、一粒の麦になるというキリスト教のヒューマニズムが支えにあり、それに生い立ちが育んだ侠気も混ざっているように感じる。

中村哲さんの葬儀では遺族の希望で、中村さんが宿舎の自室でよく聴いていたモーツァルトの楽曲が流されたという。



楽屋口から (10)

メロディー雑感

K.191 白石 孝

前回、演奏にあまり興味が持てなかったら「リズムに目を向けてみては」という話をしました。

今日は音楽の二つ目の要素である「メロディー」について感じていることを紹介します。

(最初に弁解しておきます。書き始めたのですが終わりが見通せない。文字通り雑感で終わりそうですが。)

まず異論を唱える人は僅少だと思いますが

「メロディーが良ければ演奏は多少まずくても喝采(感動ではありませんよ)」は事実でしょう。また「名曲」とは「メロディーが素敵だ」ということを一言で表現しているというのは言い過ぎでしょうか。

ではどういうメロディーが素敵なのか。残念ながら私は答えを持ち合わせていません。

でも白石さんが素敵と思う名曲を3つ挙げよ、と言われたら即答できます。

- ・エルガーのエニグマ変奏曲、とりわけ第9変奏「ニムロッド」

- ・ブラームスのハイドンの主題による変奏曲、とりわけ第7変奏

- ・ラフマニノフの交響曲第2番3楽章

この他にもたくさんありますが残念なことにモーツァルトは少数です。

歌謡曲作曲家の場合はどういう節回しを使うと聴衆に受けるかといった経験則を持っていると言われているようです。きっとヨハン・シュトラウスもウィーンの人々に受入れられるすべを熟知していたのでしょう。

モーツァルトも父レオポルドが亡くなる1787年までは書簡などを通じ父から「聴衆に理解してもらえるように優しい曲を書きなさい。」という趣旨の事を度あるごとに言われ

ていたそうです。いわば聴き手に受ける音楽を量産する職人だったとも言えます。「職人だった」などと言う言葉を使うとお叱りを受けるかもしれませんが。

モーツァルトの名誉のために次の事も付け加えておきます。

- ・孤児院ミサを12歳の時に作曲したと言われてもなかなか信じられない。神童と言われていることにガッテン

- ・父レオポルドの死を境に音楽に深みを増したという事実。故に以後、名作と言われる曲が並んでいる

では皆様に問いかけです。「名曲」、「名作」、「名演」などという言葉はどう理解しておいでですか。まあ、この議論は沖サロンコンサートの方に任せることにしましょう。

いつか音楽は「娯楽」か「芸術」かといったことにも考えを巡らせてみたくなりました。作曲家は作曲時から芸術を目指していた？ 初演、即喝采ではなかった例は珍しくないのです。マーラーに至っては当時はまったく評価されず「私の音楽は50年後に理解される」といって世を去りました。ひょっとしてマーラーはエイリアンだった？ 予言的中。死後49年を経た1960年からブレイクが始まりました。

いささか話が蛇行してしまいましたが原稿の締め切り日になりましたので今回はここで筆を置かせて頂きます。(つづく)



▽創立40周年記念公演《コジ・ファン・トゥッテ》は大好評でした。その感動を記憶し、記録に残しようとして投稿をお願いしたところ、たくさんの方の原稿をお寄せ頂き、誌面がパンク寸前までになりました。ありがとうございました。

コロナウィルスの流行に襲われるわずか1カ月前のことでした。その幸運は、かみしめてもいいものでしょう。▽パンデミックスは現代文明の脆さを白日の下にさらしていますが、有史以来の災厄であることに変わりありません。モーツァルト一家は1767年ウィーンへ旅します。運悪く、天然痘が大流行したためオルミュッツ（現在はチェコの都市）へ避難しましたが、姉ナンネルともども天然痘にかかり、危うく命拾いしました。西方大旅行ではロンドンでレオポルトが病気になり、帰途デン・ハーグでナンネルがチフスで死にそうになり、ウォルフガングもチフスに罹りました。当時の人は死と隣り合わせに生活していたことがよくわかります。▽今回のウイルス対策で留置する検疫が復活していますが、14世紀ヴェネツィア共和国はペスト流行の教訓から、入港する船をペストの潜伏期間40日係留した後、上陸を許可しました。この隔離検疫が欧州標準となり、イタリア語で40日間を意味する *quarantine* が検疫の語源になりました。マイケル・ケリーは回想録のなかで、ストレス兄妹との終生つづく友情のきっかけとなった、ピサの隣町リヴォルノ港での出逢いを紹介しています。船は検疫所の近くに横付けされ、係官が入ってきて健康チェックが済まされた後、上陸し通関ハウスにパスポートを見せに行くところ、突堤の上でスティーヴンとナンシーに出逢い、一生の友になったと記しています。▽『ベニスに死す』はトーマス・マンの小説とヴィスコンティの映画で有名ですが、ヴェネツィアを背景に主人公の光と影を描いています。コレラの流行が始まり、得体の知れない人達が秘密裏に街の消毒を行います。当局は国際観光都市を守ろうと事態を隠蔽し、街の光と影が描写されます。結局主人公はコレラで亡くなります。マーラーのアダージェットがそれらの光と影を予感させ、また現実として映し出します。それがマーラー・ブームのきっかけになりました。

(ガーディナー・イズミ)